みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Ethnic Groups iBorder Regions of China in Historical Times : An Appraisal of “Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas” by Wolfram Eberhard. Part I : General Considerations



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 大林, 太良<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.15021/00004187 |

# 中国辺境諸民族の文化と居住地

## ——エーバーハルト説の紹介と評価——

## そのⅠ．概観

大　林　太　良

# Ethnic Groups in Border Regions of China in Historical Times: An Appraisal of "Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas" by Wolfram Eberhard. Part I: General Considerations

Taryo OBAYASHI

Wolfram Eberhard (1909–1989), the German born sinologist and ethnologist, published his two major contributions to the ethnology and cultural history of China in 1942: *Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas* (Culture and Settlement of Peoples in the Border Regions of China) and *Lokalkulturen im alten China* (Local Cultures in Ancient China). These two works are companion volumes; *Kultur und Siedlung* classifies and describes non-Han Chinese peoples on the outskirts of China Proper in historical times, while *Lokalkulturen* formulates local cultures which are supposed to have contributed to the formation of Chinese civilization, using data from the cultural history and folklore of the Han-Chinese. Both aim at the reconstruction of ethnic components of Chinese civilization and contain stimulating insights and suggestions.

*Kultur und Siedlung* classifies about 800 non-Chinese peoples into 5 major categories: (1) Peoples in northern border regions, (2) peoples in western border regions, (3) peoples in southern border regions, (4) legendary peoples, and (5) peoples recorded only for ages before the Han dynasty. Categories 1 to 3 are subdivided further into some local groups of peoples respectively. Each local group represents a culture

* 東京女子大学，国立民族学博物館共同研究員

**Key Words** : China, border regions, ethnic groups, history, Eberhard
キーワード：中国，辺境，民族，歴史，エーバーハルト

complex and belongs to a linguistic family.

In the present paper I have tried to evaluate Eberhard's results from three view points: ecological background, linguistic affiliation and prehistoric foundation. Eberhard's groupings fit quite well with the physiographic areas proposed by G.B. Cressey. This implies that each group probably developed in a specific ecological area, although Eberhard paid only scanty attention to the ecological conditions of his groups. The study of dialects of the Chinese language by M. Hashimoto indicates that most of the southern dialects developed on non-Chinese substrata. This lends support to the cardinal idea of Eberhard that Chinese civilization contains a series of non-Han components. Yet in some points his theory is weakly founded; he supposed, for example, that both the Yao and the ancient Yüeh were Austronesian speakers, and the Liao Austroasiatic speakers. These are very dubious attributions in the light of recent studies by P. Benedict and E.G. Pulleyblank. Contemporary archaeological investigations by Chinese scholars, among others Su Bing Qi, have revealed the existence of some local cultures in the neolithic age which eventually contributed to the formation of Chinese civilization. Eberhard's pioneer attempt to classify non-Han peoples and to establish local ethnic cultures anticipated in a sense the recent movement by Chinese archaeologists. Eberhard was right in the main in his classification of peoples and cultures. Yet his theory has a shortcoming in that he failed to recognize the cultural and linguistic local unit which made up the core of the Chinese and their civilization, located in the Middle Yellow River area.

1. はじめに
2. エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』の内容
3. 『辺境諸民族』と『地方諸文化』との対応
4. 辺境諸民族の生態学的基盤
   a. 地勢区分
   b. 作物領域
5. 民族群と語族——橋本，ベネディクト，プーリーブランク
   a. マスペロ，ブルーシェクの立場
   b. 橋本万太郎
   c. ポール・ベネディクト
   d. プーリーブランク
6. 先史時代における民族分布
7. 結語

## 1. はじめに

中国文明の形成には，さまざまな系統の文化複合がかかわっていたという構想の先駆者の一人は，別稿で論じたようにウィーンのコッパースだった [大林　1965]。しかし，コッパースは中国研究の専門家でなかったし，またその説もヴィルヘルム・シュミットの文化圏説の応用という色彩が濃かったので，いろいろの創見や問題点の指摘という功績はあったものの，全体としてみて，その寄与は限られたものであり，また後の研究者への影響は事実上なかったと言ってもよい。

これに対して，本格的な中国研究者であり，中国語資料を駆使し，資料のなかからさまざまな文化複合を仮説的に検出しようと努力し，大きな成果をあげたのは，ベルリンのヴォルフラム・エーバーハルト（1909–1989）だった[1]。エーバーハルトは本格的な中国研究者としての訓練を受けるとともに，ベルリンのトゥルンヴァルトの弟子として民族学，社会学を学び，また一時はベルリンの民族学博物館に関係していたことがあった。第二次大戦前に中国内部で調査し，また大学で教えていたが，トルコのアンカラ大学にうつり，戦後はアメリカに行き，カリフォルニア大学教授となった。エーバーハルトの人と学問については語るべきこと，論ずるべきことは多いが [Allan and Cohen　1979: xix-xxiv, 225–266; Cohen　1990; 大林　1992, 1995]，ここでは彼の中国文化形成論とそれに関連した中国地方文化論に話を限ることにしよう。

エーバーハルトは1930年代後半から1940年代前半にかけて，中国の伝統的文化や民俗，周囲民族についての厖大な資料を独力で集成整理し体系化する三つの大きな仕事を行った。第一は1937年に刊行された『中国民譚の諸形式』[Eberhard　1937a] であって，中国の神話，伝説，昔話の資料を，中国資料に則した独自の分類法で整理したものであり，今日も価値を失わない名著である。この本においても，個々の形式の分布状態に注意が注がれている。そして1942年には二つの大きな試みが公刊された。一つはこの『中国辺境諸民族の文化と居住地』であって，中国周辺の800種に上る古今の民族を分類記述し，体系化したものであり [Eberhard　1942a]，もう一つは『古代中国の諸地方文化』で，こちらは主に漢民族の民俗の分析を通じて，中国文明形成に参与したいくつかの地方文化を取り出す試みであった。原稿はすでに1940年に完成していたが [Eberhard　1942a: 499]，戦時中という時代的状況のため，1942年になっ

1）彼の姓の発音は，ちょっとしたドイツ語の辞書にも出ているように，é:bər-hart である。語頭のエにアクセントがあり，伸ばさなくてはならない。

て第1巻つまり北と西の地方文化の巻はライデンで，南と東の地方文化をとりあつかった第2巻は北京で刊行された [EBERHARD 1942b, 1942c]。『中国民譚の諸形式』が刊行された時はエーバーハルトはまだ28才であり，『中国辺境諸民族の文化と居住地』と『古代中国の諸地方文化』が刊行されたのは33才の時であった。まさに早熟の天才であった。それとともに，ドイツ国籍をもちながらナチスから逃れ，放浪を重ね縄渡りのような危い生活を送るなかで，明日はどうなるか知れぬ状況のもとで，早く成果をまとめ，公表しておきたかった彼の気持が私には察せられるのである。これらの著作には拙速の仕事の結果とみられる欠点も散見するが，それはこのような状況を背景にもっていることを理解して評価されるべきであろう。

エーバーハルトの中国文化形成論の大きい特徴は，彼の中国における実地調査の経験が背景にある [EBERHARD 1937b]。そのことを別として，彼の研究はまず中国内部や周囲の諸民族についての厖大な資料を整理し，いくつかの民族群を検出したことである。この作業が，これから紹介する『中国辺境諸民族の文化と居住地』[EBERHARD 1942a] であって，このような作業があったからこそ，彼の『古代中国の諸地方文化』[EBERHARD 1942b, 1942c] においては，漢民族の民俗や伝承を分析した結果をたとえば《タイ文化》とか《ヤオ文化》というような民族名のついた文化複合としてまとめることができたのであった。エーバーハルトの再構成の具体的な結果については，いろいろ問題はあるにしても，彼がこのように諸民族についての資料の整理と，系統的分類という作業を行っていたことは，たとえばほぼ同時代の岡正雄の日本民族文化形成論 [岡 1994] には見られない，重要な長所だったのである [大林 1977]。

それはともかくとして，辺境文化の研究をうけて行われた地方文化の分析は，時間的にも空間的にも一歩を進めることになった。一つの地方文化は対応する辺境文化よりも広い分布をもち，また時間的深度において，しばしば一千年あるいはそれ以上も深く遡ることが可能となった。地方文化同士が接触した場合，地方文化全体がそれに参与したのではなく，むしろ《境界過程》Grenzprozess として行われ，摩擦し合っている双方の部分が一つに融合し，新しい単位が生じるようになった。その場合，地方文化は地方文化であることを止め，辺境文化，つまり新たに生じた中核の辺境部にある文化に変化して行ったのである [EBERHARD 1942b: 9–11]。

エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』で論ぜられた辺境諸民族とその文化とは，そのような性格のものなのである。中国高文化の形成に参与した諸地方文化のうち，中国高文化の内部にはとり込まれないで，変化しつつも周辺に残った部

分，それが辺境民族であり，辺境諸民族文化だったのである。

## 2. エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』の内容

エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』[EBERHARD 1942a] は，『通報』36巻別冊として1942年にオランダのライデンで刊行された，506ページの大冊である。同書においてエーバーハルトはほぼ800種に上る古今の中国周辺の諸民族を，地域的・文化類型的に分類し，中国文献，ことに史書に現われたその民族誌的な特徴を要約し記述した。ただ彼の主な関心は中国文明発生を基層的な諸地方文化から解明しようという点にあるので，これに関係しない西北部のテュルク系諸族（ウイグル，キルギスなど）は取り扱われていない。また取り上げる年代も地域や群によってさまざまであってたとえば北方諸民族の資料はほぼ唐代までのものであるが [EBERHARD 1942a: 67]，南方諸民族の場合は近代の資料も用いている。それは，この地域では比較的後になって諸民族が知られるようになったためであり，また古い時代の記述が断片的で近代の記録と合せてはじめて理解できるようになる場合があるからだ [EBERHARD 1942a: 371]。そしてエーバーハルトはあらためて明記していないが，これら比較的新しい資料も併せ用いないと，彼が中国文明形成に参与したと考える《タイ文化》や《ヤオ文化》といった地方文化ないし文化複合がうまく再構成できなかったからでもあろう。

エーバーハルトはこれら辺境諸民族を大きく

1　北方辺境諸民族
2　西方辺境諸民族
3　南方辺境諸民族
4　伝説（フェーベル）諸民族
5　古代諸民族

の5大群に分ち，1から3までは，それぞれ6，5，11の小群に分けて論じている。このような小群はさらにさまざまな歴史上の諸民族ないし諸種族に分れている。たとえば2の西方辺境諸民族の第1小群は羌諸族であって，阿鈎，沈種など62民族ないし種族を含んでいる。これらを羌諸族という小群にまとめたのは，主としてそれらが中国人によって羌だと認められているからである [EBERHARD 1942a: 83]。このように中国人自身がどのように諸民族を分類していたかを手がかりにするというのは，本書を

通じて見られる原則であって，あとで述べるように，エーバーハルトはこの方法は有効であったと評価している。この原則の少数の例外の一つは南方辺境諸民族のなかのチワン諸族という小群であって，これは中国人自身がそう分類しているというのではなく，言語学的に見てタイ語族に属する諸族をまとめたものなのである[EBERHARD 1942a: 192]。

彼は各小群においては，そこに属する各民族を，居住地域（略号V），文化（K），主要資料以外の資料（ヨーロッパ語文献を含む）の指示（W），註記（B），その民族が資料上最初に現われた時代（主として王朝名）（Z）の順で記し，V，K，Bについてはそれぞれ出典を記している。したがって大変よく整理されていて見やすい形式をとっている。

そしてその小群の諸民族の記述が終ると，その小群についての考察が行われ，そのあと次の小群に移る。こうして一つの大群のなかのすべての小群を論じ終ると，その大群についての一般的要約が行われる。巻末には本書の成果と結論がまとめられ，最後に民族別，氏族名（姓）別，地名別，事項別の索引がつき，さらに文献目録がついている。

それではこれから具体的な成果の紹介に移ることにしよう。

## A　北方の辺境諸民族

この大群は，（a）朝鮮諸民族，（b）粛慎諸民族，（c）東胡諸民族，（d）室韋諸民族，（e）匈奴諸民族，（f）その他の北方諸民族に分れる。

この大群の合計70民族がつくる上記の5小群は，それぞれ漢代にはまだきちんと構成されていた群であった。例外はf小群のうちの3民族で，これらは中国からあまりに遠くに住んでいたのである。

5小群のうちの三つ，つまり匈奴，室韋，東胡は遊牧民であり，粛慎小群は，少しは農耕を行ってはいるが，主として狩猟民＝豚飼育民である。朝鮮諸民族群は農耕民的傾向が強い。

エーバーハルトによると，匈奴諸民族は馬牧畜民文化を特徴とするテュルク系民族であり，室韋諸民族は牛＝馬飼育民文化をもつ古モンゴル系民族であり，東胡諸民族は完全に単一的ではない牛飼育民文化の古モンゴル系民族だった。粛慎諸民族はツングース系だったに相違ない。朝鮮諸民族は単一的でなく，ツングース（粛慎）系要素やテュルク系要素に並んで，中国高文化要素と華南諸文化（ことに越文化）の要素も含んでいる。

これら北方の5文化は，原基文化 Grundkultur ではなく，すでに部分的に他文化と混合したものである。たとえば，室韋文化と東胡文化は，ともにより古い狩猟民文化から発生した馬飼育民文化（原テュルク文化）とより古い豚飼育狩猟民文化（原ツングース文化）の接触の結果生じたものなのである。奇妙なことにこれら北方諸文化中には古アジア（語族）的要素の痕跡が見られないが，粛慎諸民族のなかには古アジア的な文化をもった民族が潜んでいるのかも知れない。朝鮮文化の固有の構成要素は古アジア的なものかも知れない [EBERHARD　1942a: 67–68, 416]。

このエーバーハルトの分類は，近年の中国の学者のそれとはほぼ一致する。たとえば田継周は漢代の東北諸族を次の三つの民族集団に分類した。

第1の民族集団は夫余，朝鮮，高句麗，沃沮，穢あるいは穢貊を包括し，この集団は漢代の文中には往々にして貊あるいは貊として総称されている。

第2の集団は，烏桓（また烏丸とも書く）と鮮卑であって，かつてはまとめて東胡と呼ばれた。春秋時代には山戎に属していた。

第3の集団は挹婁などである [田　1990: 147–148]。

つまり，田の第1集団はエーバーハルトの（a）朝鮮諸民族，第2集団は（c）東胡諸民族，第3集団は（b）粛慎諸民族に相当するのである。このような一致は，エーバーハルトの分類が，もっともなものであることを示している。

B　西方の辺境諸民族

この大群は，（g）羌諸族，（h）西チベット族，（i）烏蛮諸民族，（j）番諸民族，（k）その他の西南諸民族の5小群に分れるが，羌諸族と西チベット族は一つにまとめることもできる。

この大群にまとめられているのは西方と西南方の合計345民族である。この地域の住民のうち白蛮諸族という大きな群は，この大群から外して，次の南方辺境諸民族で取り扱われる。

ここで利用された資料の年代は，中国文献の開始期から，ほとんど近代になるまで（1800年）にわたっている。羌諸族は北方に住み，今日のいわゆるタングート諸族がここに入る。この羌諸族のなかには，タングート系以外のものも少しあり，それらは大体南や西に住んでいて，今日のチベット人（西チベット族）もここに入る。タングート族とチベット人は外来の影響を別にすると，文化的には同様であって，羊牧畜民文化である。

第2の群は番諸民族であって，文化的には第1の群に近い。他方ではこの群は南方

諸文化とも関係をもっている。彼らは重層されて出来た群なのである。このことは，この第2群が第1群の東に位置し，南方諸文化が大なり小なり支配的な地域のなかにも及んでいることと，うまく合っている。とりわけのこの文化の土地，それにその他の諸族（第4群）の土地に発生したのが，四川東部の巴文化である。

第3の群は烏蛮諸民族であって，第1群の南に位置している。その文化はまたもや羌と多くの共通性をもっているが，それとは異質の要素を含む。身体形質の上では皮膚の色が黒いことが挙げられ，この点から見ると烏蛮群はオーストロアジア系住民の上に重層したことが考えられる。そうすると烏蛮の文化が羌文化から相違することも説明がつく。

全体としてはこの群はチベット＝ビルマ語族のロロ（彝）諸族である。

第4群は，中国人は別に一括しなかったが，ヨーロッパ人の民族学的研究の結果から見てオーストロアジア系かと思われる若干の種族を含んでいる。これら諸族は一方では烏蛮，他方ではある意味では白蛮に影響を与え，また白蛮から影響を受けたらしい [EBERHARD　1942a: 173–175]。

この西方大群の諸民族は，気候的，地理的条件によっていくつかの小群に分れてはいるが，互いに密接な親縁関係がある。彼らは元来チベット語を話していたが，それが多くの親縁諸語に分れたのであろう [EBERHARD　1942a: 416]。この西方辺境諸民族のうち，極めて問題なのは第2群の番諸民族である。それは東謝蛮や《西南七蕃》などであるが，はたしてエーバーハルトの考えるように，西方辺境諸民族の枠内で取り扱うべきか，それとも，近年の中国学者の研究 [たとえば尤　1985: 216–220] のように，ブイ族などの前身として，南方辺境諸民族の一群として取り扱うべきか，という問題がある。しかし，ここではこのような個別的問題には立入らない。

### C　南方の辺境諸民族

この大群は，（l）チワン諸民族，（m）ヤオ諸民族，（n）リ（黎）諸民族，（o）ケラオ（仡佬）諸民族，（p）リャオ諸民族[2]，（q）苗諸民族，（r）巴諸民族，（s）白蛮諸民族，（t）蛋諸民族，（u）越諸民族，（v）その他の諸民族の11小群に分れる。

この大群では290民族が取り扱われている。11小群に分けられているが，大別すれ

2）僚（獠）は lao と発音すべきであるが [『中国少数民族』編写組　1981: 490]，エーバーハルトが Liao と表記していることと，ラオスの Lao 族との混同を避けるため，ここではリャオと表記する。

ば2群にまとまる。

つまり，第1の群はタイ系民族であるチワン諸民族を含む河谷居住の水稲耕作民である。ゆるやかな父権的組織をもつが多くの母権的混入要素を含み，元来の中心は広西だったらしい。この文化は他文化との接触を通じて一方では雲南で白蛮諸民族として現われ，東ではヤオ諸民族と一緒になって越諸民族をつくり上げた。

第2の群はヤオ諸民族と蛋民であって，どちらもオーストロネシア語系だとエーバーハルトは考えた。山で焼畑耕作を営み犬祖神話をもっているが，一部は水上で特殊化して船上生活者になった。古代の越諸民族はオーストロネシア系の最高峯だった。

そのほか南方辺境諸民族のなかにはリャオ諸民族が代表するオーストロアジア語族もあるし，また他方ではチベット文化の影響は巴，ケラオ，ミャオ，リャオの諸民族に及んでいた [EBERHARD　1942a: 371–372]。

これまでは，漢代以降の歴史的諸民族を取り扱ってきた。一般的に言って存在も確かであり，資料もかなりある。そしてここまでは分類の基準は北，西，南というように地理的である。ところがこの次は別の基準で民族群がまとめられる。つまり，エーバーハルトはそれ以外の諸民族を，伝説上の諸民族と古代諸民族つまり漢代以前の諸民族の二つに分けたのである。

## D　古代諸民族

伝説上の諸民族は，ここでは立入らないことにしよう。なかには現実のものの伝説化したものもあろうが，辺境諸民族として取り扱うには，あまりに不確実だからである。

これに反して，漢代以前に現われ，それ以降には漢代以前の名では現われなくなる古代諸民族は，辺境諸民族の研究にとって重要である。この場合も，エーバーハルトは中国人自身がいくつかの民族を一群にしてまとめて分類していたことと，その呼称が研究の手がかりになるという立場をとる [EBERHARD　1942a: 378–379]。

しかし，これら古代諸民族の文化内容については，ほとんど資料がない。少なくともエーバーハルトはあまり記していない。したがって彼がそれら諸族の所属について下した結論は，その居住地域，中国人の行った同定，それに僅少な文化的手がかりにもとづく推測である。

エーバーハルトが大きな保留を付しつつも提出した考えによると，

（a）戎諸民族は後世の羌と同定できる。

（b）狄は後世の東胡と同定できる。

（c）玁狁は匈奴と同定できる。

（d）夷は後の越諸族と同定できる。

このうち夷が中国高文化にもっとも早く融合した。この過程は全体としては前一千年紀の半ばには完了していた。その他の民族のところでは，融合過程は，部分的にはもっと長くかかった。

さらに二，三の個々の古代民族（たとえば荆，九黎など）は，後世の文化群，ことに南方諸民族と結びつく点をもつものもある。

最後に，前一千年紀の半ばには，（初期ツングース的な）粛慎が山東省中央部にまで入りこんで住んでいた可能性がある。しかし数パーセントの蓋然性以上には，どこでも達していない [EBERHARD　1942a: 386–387, 389–390]。

エーバーハルトが（b）狄，（c）玁狁について考えたことは，近年の中国の学者の分類に近い。つまり，田継周は周代の北狄はほぼ2系列に分けることができるという。一つの系統は玁狁，犬戎，狄，これを細分すると赤狄，白狄，長狄，戦国時代には胡および匈奴と呼んだものである。もう一つの系列は粛慎，貊，貉，山戎で戦国時代には東胡と呼んだものである。最初の群の分布は西に偏り，後者は東に偏っていた [田　1990: 76]。

エーバーハルトは古代諸民族のなかで，夷系統としてまとめられる民族を12民族挙げている。

エーバーハルトによれば夷の文化の資料としては徐偃王の神話以外はほとんど何もない。この神話での卵や，犬の役割はヤオ群と類似する。

夷諸民族の分布は南山東，北江蘇，北安徽であるが，山東東端にも萊夷がいた。山東の邾婁（後に邾に縮められた）やその他の二重名をもつ（大部分は両字とも同じか類似した語尾の音をもつ）のは夷の系統である。

夷諸族の分布地は後のヤオ諸族の分布地のすぐ北に接している。夷諸族はふつう周代以前に消滅し，残存していたものも前3世紀に消滅する。侵入して来た漢民族に吸収同化されたらしい。夷は戎や狄とは違って，低い土地や低い丘陵地に居住する。彼らは呉や楚と多くの接触をもち，政治的にはしばしばそれらと合同した。

エーバーハルトは暫定的に夷を越民族の前身と見ることを提唱する。その場合，越文化自体が，ヤオ文化要素とタイ文化要素に分かれることを指摘している。夷はもはや純粋なヤオではないらしい。それは夷が低地や低い丘陵地に住み，他方ヤオはいつも山地に好んで住むからだ。歴史時代においても，平地にも住む越人の地域は山東東部にまで伸びていたのであるから，恐らく夷は越の古い一つの分岐であって，越と同

様にいくつもの要素が混合していたが，そのなかには強力なヤオ要素が入っていたのである [EBERHARD 1942a: 385–386]。

以上が，エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』の概要である。この壮大な試みには，当然いろいろな問題点が含まれており，すぐれた創見も少なくないとともに，今日では支持できない見解もいろいろ見られる。本稿では，細かい個別的問題に立入ることはできないが，若干の一般的な問題について論ずるにとどめることにしたい。

それに先立ってエーバーハルトが民族分類に当って採用した方針について一言しておきたい。上にも述べたように，彼は，民族分類に当って，中国人が同類と認めたものを一つの群としてまとめる方針をとった。それが大体において成功だったと自ら認めているのは，ある程度理解できる。それは分類した当時の中国人も，主として言語，文化などを手がかりに分類していたと思われるからである。さらに記録にのこった少数の文化特徴以外にも，その当時には利用できたその他の情報が多数あったに相違なく，それもこのような分類の基礎にあることが考えられるからである。しかし，他方では，このような分類は立入った研究の結果ではなく，多分に皮相な印象的なものであるので，中国人による分類は必ずしも常に正しいとは限らない。したがって，一応の目安ないし，本格的な分類のための手がかりであると言ったほうがよいであろう。

## 3. 『辺境諸民族』と『地方諸文化』との対応

上述のようにエーバーハルトは『辺境諸民族』をまとめた後，中国内部の，漢民族の文化についての資料を大幅に使って『地方諸文化』を著した。そこで設定された諸文化は，ほぼそのままその後の『中国文明史』にも現われる。これら地方諸文化は，基本的に辺境諸民族に対応するものであって，次の諸文化である。まず第1巻 [EBERHARD 1942b] では

北方諸民族文化
北方文化の後期形態
チベット文化
巴文化

が論ぜられ，第2巻 [EBERHARD 1942c] では

ヤオ文化

タイ文化

越文化

リャオ文化

ツングース文化

が取り扱われている。『中国文明史』では『地方諸文化』とほぼ同じであるが，ツングース文化は北東文化と呼ばれ，北方諸民族文化をモンゴル系の北方文化とテュルク系の北西文化とに二分している。チベット文化はそのままであるが，巴文化は本文では出ておらず，分布図の説明では東チベット文化と呼ばれている。リャオ文化，ヤオ文化，タイ文化，越文化を南方の4文化と呼んでいる [EBERHARD 1977: 4–7; エーバーハルト 1991: 7–11]。

これから『辺境諸民族』と『地方諸文化』の対応を見よう。

まず北方辺境諸民族について。この大群は（a）朝鮮諸民族，（b）粛慎諸民族，（c）東胡諸民族，（d）室韋諸民族，（e）匈奴諸民族，（f）その他，を含んでいた。このうち粛慎諸民族はツングース文化（北東文化）に対応し，東胡諸民族，室韋諸民族，匈奴諸民族は北方諸民族文化に対応している。『中国文明史』では，東胡諸民族と室韋諸民族が北方文化，匈奴諸民族が北西文化に対応する。

次に西方辺境諸民族は（g）羌諸民族（h）西チベット族，（i）烏蛮諸民族，（j）番諸民族，（k）その他を含んでいた。『地方諸文化』でチベット文化と呼んでいるのは羌諸民族に相当する。

南方辺境諸民族は，（l）チワン諸民族，（m）ヤオ諸民族，（n）リ諸民族，（o）ケラオ諸民族，（p）リャオ諸民族，（q）ミャオ諸民族，（r）巴諸民族，（s）白蛮諸民族，（t）蛋諸民族，（u）越諸民族，（v）その他，から成っていた。

このうち巴諸民族は『地方諸文化』では南方よりむしろ西方の一文化として，チベット文化に次いで論ぜられ，『中国文明史』では東チベット文化と呼ばれている。次にヤオ諸民族はヤオ文化に相当するが，他方，チワン諸民族と白蛮諸民族，リ諸民族の三つはタイ文化に対応している。越諸民族とリャオ諸民族はそれぞれ越文化とリャオ文化に対応している。

このように見ると，『辺境諸民族』の分類は『地方諸文化』のそれに大幅に対応していることが認められる。ただ，北方辺境諸民族のうちの朝鮮諸民族や，西方辺境諸民族のうちの西チベット族，烏蛮諸民族，番諸民族は中国高文化の形成に直接参加していなかったから対応がないのは当然である。南方諸民族のうち，上の対応には出てこないケラオ諸民族はリャオ諸民族を基礎とした混合民族であり，蛋諸民族は古代の

越諸民族から派生したことは『辺境諸民族』でも認められている [EBERHARD 1942a: 236, 331]。そしてミャオ諸民族の文化はエーバーハルトによれば，チワン，ヤオ，チベットの3文化の混合によって成ったものである [EBERHARD 1942a: 271–273]。つまり後に出来た混合文化の民族だから，これも中国高文化の生成には参与していなかったわけである。

このように対応に出てこないものにはそれなりの理由があり，全体として『辺境諸民族』の分類は『地方諸文化』で確認されたという見方をエーバーハルトはとっている。

ただそのなかで興味深いのは巴文化のように，所属上ある程度の動揺のあった文化や民族である。

## 4. 辺境諸民族の生態学的基盤

次にエーバーハルトの体系を生態学的領域，言語系統，先史文化という三つの観点から順々に検討することにしたい。

エーバーハルトの研究で不満に感じることの一つは，それぞれの民族群がいかなる生態学的環境のもとに生活していて，独自の文化を育てて行ったか，という点の考察がほとんどなされていないことである。断片的な発言はあっても，組織的な分析は行われなかった。

したがって，エーバーハルトが設定した民族群と中国における生態学的領域との対応を調べてみることは興味深いことであろう。これによって我われは，生態学的領域との結びつきの緊密な民族群，複数の生態学的領域にまたがって分布する民族群，歴史上一つの生態学的領域から他の領域に移動した民族群，同一の領域内に並存し，棲み分けたり混在したりしている複数の民族群などを区別することができる。またそれによって彼らの歴史と文化について，新しい視野が開けてくることが期待されるのである。

中国における生態学的領域区分については，私はここでは二つの手がかりを使うことにする。一つは地勢区分であり，もう一つは作物領域である。

### a. 地勢区分

地勢区分に関しては，私はここではアメリカの地理学者ジョージ・バブコック・クレッシーの古典的な区分を採用したい [CRESSEY 1934]。国際的に広く知られている

体系であるばかりでなく，その後の研究でも基本的には大きな相違はなく，またかなり詳しい区分なので，一応の大ざっぱな検討には，これで充分だからである。これからエーバーハルトの民族区分を記し，それぞれが占めていた領域を想定することにする。なおアルファベット大文字による記号はクレッシーの略号である。

A　北方辺境諸民族

（a）朝鮮諸民族――中国の領域外の朝鮮のほか，中国内部では東部満州山地（MEM）。

（b）粛慎諸民族――興安嶺（KM）と東部満州山地（MEM），それに中国の領域外の沿海州の山地。

（c）東胡諸民族

（d）室韋諸民族

（e）匈奴諸民族

（f）その他の諸民族――以上cからfまでは，基本的には中央アジア草原および沙漠（CASD）に居住していた。

B　西方辺境諸民族

（g）羌諸民族

（h）西チベット族

（i）烏蛮諸民族――以上gからiまではチベット辺境地（TB）。

（j）番諸民族――西南台地（つまり雲貴高原）（ST）。

（k）その他の西南諸民族――これも西南台地（ST）か。

C　南方辺境諸民族

（l）チワン諸民族――両広丘陵（HL）。

（m）ヤオ諸民族――両広丘陵（HL）。

（n）リ諸民族――両広丘陵（HL）のうち，海南島。

（o）ケラオ諸民族――西南台地（ST）。

（p）リャオ諸民族――元来四川省東部に住んでいたが山地民だから，中央山脈地帯（CMB）か。

（q）ミャオ諸民族――南揚子江丘陵（SYH）と西南台地（ST）。

（r）巴諸民族――赤盆地（RB）。

（s）白蛮諸民族――西南台地（ST）。

（t）蛋諸民族――東南海岸地帯（SC）。

（u）越諸民族――東南海岸地帯（SC）と，南揚子江丘陵（SYH）。

（v）その他の諸民族――中国南部のさまざまな地域とインドシナに住む雑多な民族で，特定の生態学的領域に当てはめることはできない。

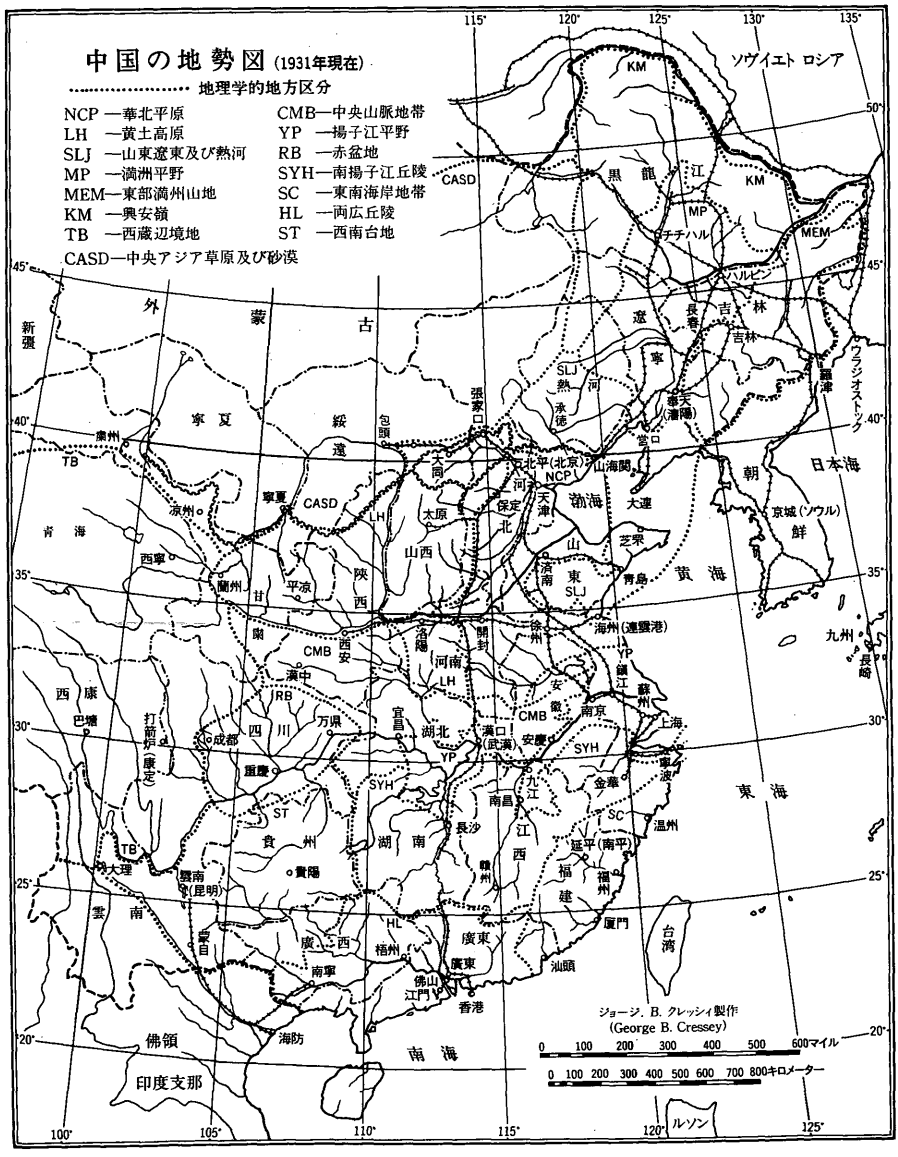


図1　中国の地勢地図（1931年現在，カッコ内は現都市名）[CRESSEY　1934]

そのほか古代諸民族のうち，

（a）戎諸民族は後世の羌と同定できるが，秦嶺山脈を中心地としてもっていたと考えられるから [EBERHARD 1942a: 380]，中央山脈地帯（CMB）。

（b）狄は後世の東胡だというが，その居住地は山西省東部山地である [EBERHARD 1942a: 382]。黄土高原（LH）であろう。

（c）玁狁は匈奴と同定できるというが，その居住地は陝西省の西安の北の洛水流域であった [EBERHARD 1942a: 384]。してみると，これも黄土高原（LH）であった。

（d）夷は越と同系と考えられたが，その主要居住地は南山東，北江蘇，北安徽である [EBERHARD 1942a: 385]。してみると基本的には揚子江平野（YP）が居住地であって，一部，山東，遼東，熱河（SLJ）にかかっているという程度であろう。

以上の極めて大雑把な対応の試みによっても，歴史時代には中央アジア草原および沙漠の居住民だった北方の諸民族が，かつては黄土高原にも伸びていたこと，また歴史時代にはチベット辺境地の住民だった西方諸民族が中央山脈地帯にも住んでいたこと，また東南海岸地帯と南揚子江丘陵を本拠としていた越諸民族と親縁の夷諸民族は，生態学的領域としてはその北の揚子江平野の住民だったという興味深い状況を知ることができる。

また問題点として出てきたのは，中央アジア草原および沙漠に住んださまざまの北方諸民族群の，それぞれが，この大領域内のいかなる生態学的下位領域に分れ住んでいたか，また西方諸民族の諸群がチベット辺境地のなかのいかなる下位領域に対応していたか，否か，という問題である。両広丘陵，西南台地などについても同様な問題が存在しているのである。

### b. 作物領域

生態学的背景を考えるのに便利なもう一つの手がかりは，ロッシング・バックが区分した中国の作物領域である [BUCK 1937; SPENCER 1954: fig. 103]。そのなかには，トウモロコシのような新しい栽培植物も含まれている。しかし，このトウモロコシの場合は，それ以前の時代においては粟などの雑穀だったことが考えられるように，近代の作物領域でも，何らかの意味でより古い時代の作物領域を反映していることが少なくないと思われる。たとえそうでない場合でも，近代の作物領域は，温度，雨量そ

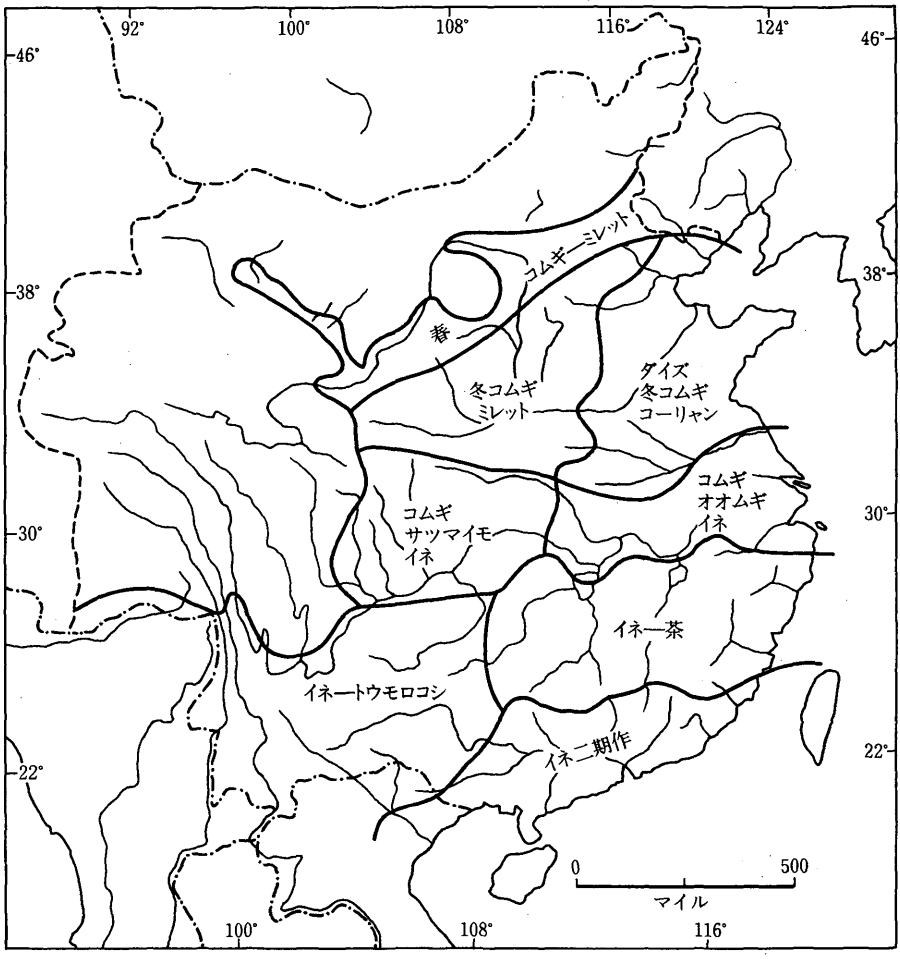


**図2**　中国の作物領域 [SPENCER　1954]

の他の自然環境上の条件によって規定されている以上，やはり一種の生態学的領域を表わしているのである。

とは言っても，バックの資料にもとづいてスペンサーが作図した中国の作物領域はかなり大まかなものであり，ことに少数民族地域を充分留意しているようには思えない。たとえば歴史時代における西南の少数民族の焼畑の作物体系については，佐竹靖彦が若干の資料を提示している。それによると，便宜上，番号をつけると①南宋の范成大の『范石湖集』巻16に記された夔州巫山県，つまり現四川省東端で長江北の平山県では，粟，麦，豆の体系だった。②清代の『同治増修施南府志』巻10によると，現在の湖北省西南突出部の恩施県では，芋類をまじえて蕎麦，麦，豆の組み合せだった。

この例は牛耕の導入後のものだが，佐竹によると以前の体系の残ったものである。③明代の『徐霞客游記』の「滇游日記」巻7によると雲南省麗江では陸稲と豆の定畑での栽培であった。④また『光緒叙州府志』巻22によると，四川省西南部の凉山のイ族のところでは，蜀玉黍（＋薯類）か，稗，蕎麦，燕麦などの焼畑耕作が行われていた。⑤さらに『徐霞客游記』の「滇游日記」巻11には，雲南西部の怒江上流枯柯，保山附近のイ族は燕麦（これはおそらく莜麦）と蕎麦を作っていた[佐竹　1968: 45-46]。このように作物構成は地域によりさまざまである。

そしてこれらの例のうち，①と②はバックの《コムギ，サツマイモ，イネ》領域に，また③から⑤までは《イネ＝トウモロコシ》領域に入る地理的位置にあるが，そこで作られている作物はバックが指標的な作物として挙げたものと必ずしも一致しない。たんに時代の差ばかりでなく，作物は個々の地点での地味，気候などの条件によって相違する。ことにイ族のような山地民のところでは，高度によって作物が異なり，燕麦などは高いところにだけ作られている。

したがって，ここで私がバック＝スペンサーの作物領域を使うのは，あくまでも大きな生態学的領域の枠組を示すためである。イネ＝トウモロコシ領域に住む民族群がすべて，かつ昔から，この二つの作物を主に栽培して来たという意味では決してないことを，お断りしておきたい。

これから具体的な対応関係について考えてみることにしたい。

A　北方辺境諸民族

これについては，あまり多くを引き出すことはできない。それは一つはバックの区分中に，中国東北地方や朝鮮半島が入っていないことであり，もう一つは北方諸民族のうち遊牧民については，作物領域を云々するのは不適当だからである。ただ，東胡，室韋，匈奴諸民族は，部分的には春コムギ＝ミレット領域に入ることだけ指摘しておきたい。

B　西方辺境諸民族

羌，西チベット，烏蛮の諸民族はバックの分類の外にあるので，不明である。しかし，(j) 番諸民族と，(k) その他の西南諸民族は，バックの分類ではイネ＝トウモロコシ領域に入る。

C　南方辺境諸民族

（1）チワン諸民族――イネ二期作領域。

(m) ヤオ諸民族――主としてイネ二期作領域であるが，一部はイネ＝茶領域とイネ＝トウモロコシ領域。

(n) リ諸民族――イネ二期作領域（海南島）。

(o) ケラオ諸民族――イネ＝トウモロコシ領域。

(p) リャオ諸民族――コムギ＝サツマイモ＝イネ領域。

(q) ミャオ諸民族――主としてイネ＝トウモロコシ領域。

(r) 巴諸民族――コムギ＝サツマイモ＝イネ領域。

(s) 白蛮諸民族――イネ＝トウモロコシ領域。

(t) 蛋諸民族――主としてイネ二期作領域の海岸。

(u) 越諸民族――イネ＝茶領域を主とし，コムギ＝オオムギ＝イネ領域にかかる。

(v) その他の諸民族――特定できず。

古代諸民族のうち

(a) 戎諸民族――冬コムギ＝ミレット領域。

(b) 狄諸民族――冬コムギ＝ミレット領域。

(c) 玁狁――春コムギ＝ミレット領域あるいは冬コムギ＝ミレット領域ではないか。

(d) 夷――主としてコムギ＝オオムギ＝イネ領域に，ダイズ＝冬コムギ＝コーリャン領域の一部を含む。

以上二つの手がかりからエーバーハルトの諸民族群と生態学的領域とを比較してみた結果，いくつかの重要な結果が出てきた。

（A）北方辺境諸民族に関しては，まず (a) 朝鮮諸民族の一部と (b) 粛慎諸民族は山地つまり森林の民族であって，(c) 東胡諸民族，(d) 室韋諸民族，(e) 匈奴諸民族，(f) その他の諸民族が草原の民族だったのとは，生態学的環境を異にしていたことが注目される。いわゆる北方辺境諸民族は大きくみて，山地森林民族と草原民族に二大別できるのである。また草原諸民族のいくつかは，古代においては，草原ばかりでなく，畑作可能な地域にも深く入り込んでいた。

（B）西方辺境諸民族に関しては，チベット辺境地を主な領域としているが，古代には中央山脈，ことに秦嶺山脈つまりコムギ＝サツマイモ＝イネ領域にも分布し，さらに西南台地つまりイネ＝トウモロコシ領域に広く展開した。この西南台地に展開した諸民族は，Cの南方辺境諸民族との移行型ないし接触型とみる可能性がでてく

る。

（C）南方辺境諸民族は，さまざまな生態学的領域にわたって分布している。主として両広丘陵，つまりイネ二期作領域に住むチワン，ヤオ，リ諸民族，主に西南台地つまりイネ＝トウモロコシ領域に住むケラオ，ミャオ，白蛮諸民族，地勢的には東南海岸地帯だが，主にイネ二期作領域の海岸の蛋諸民族，イネ＝茶領域を主とする越諸民族といったぐあいである。

このように，西南台地などは，さまざまな系統の民族を含んでいるが，彼らは棲み分けをし，あるいは混在している。周知のように，大きな生態学的な一つの領域は，しばしばさまざまな生態学的ニッチを含み，それに応じてさまざまな生活様式をもつ民族が棲み分けをする。その古典的な例はノルウェイの社会人類学者フレデリック・バルトが研究したパキスタン北部のスワット Swat 地方である。ここでは，定住し灌漑農耕を営むパタン Pathan 族，パタン族が利用できない荒地を利用する半農半牧民のコヒスタニ Kohistani 族，またパタン族のテリトリーのなかで，パタン族から《牧畜民カースト》として生活を許されている遊牧民のグジャール Gujar 族の三者が棲み分けているのである [Barth 1956]。

中国西南部からインドシナに関しては，生業形態によって民族の居住の高度が相違することは広く知られている。水稲耕作を営むタイ系統の民族が河谷平野や盆地に住み，焼畑耕作を営むチベット＝ビルマ系その他の民族がより高いところに住む，というぐあいである。西南台地が，西方辺境諸民族，南方辺境諸民族のさまざまな群により，また両広丘陵では一方ではタイ（チワン）諸民族，他方ではヤオ諸民族が住んでいるが，それは多くの場合高度による棲み分けが行われているからである。

また同一系統の民族群が，異なった生態学的領域にまたがって分布する場合，それぞれの領域において，異なった発展をとげることが予想される。大体チベット＝ビルマ語族に属する西方辺境諸民族のうち，チベット辺境地に住むものと，西南台地に住んだものは，外部からの文化的，政治的影響といった要因を別にしても，生態学的条件の相違だけからでも，異なった文化を発展させた可能性が考えられる。同様なことはミャオ＝ヤオ語族についても言える。西南台地を中心とするミャオ諸族と，両広丘陵を中心とするヤオ諸族は，言語系統は同一であっても，異なった生態学的領域を主な分布領域としていることにもとづいて，相異なる文化を発達させたことが考えられる。

## 5. 民族群と語族——橋本，ベネディクト，プーリーブランク

### a. マスペロ，プルーシェクの立場

エーバーハルトは仮説的ではあるが，さまざまな民族群を設定し，それぞれの語族所属を想定した。言語学者でない彼のこの試みは，基礎が固まっておらず，いろいろ問題を含んでいる。これから民族群と語族の比定についての彼の説の検討に入るが，その前に触れておかなくてはならない問題が一つある。それは，彼が自明のこととしてこれらの民族群を非漢族としたが，そもそもそれが正しいか否かという問題である。

中国古代のいわゆる蛮族については，そのすべて，あるいは大部分が系統的に，ことに言語系統的に漢民族とはまったく相違するという説と，蛮族の大部分は漢民族と同系統だが，僻地に住むために文化が遅れ，野蛮視されていたに過ぎないという説の，二つの対立した考えがヨーロッパの研究者の間にあった。異系統を主張する学者のほうが伝統的に多く，エーバーハルトもこの群に属していることは言うまでもない。ことに北方の蛮族について，玁狁や匈奴をテュルク系民族と考え，周の文化にもテュルク系要素を想定したヒルト [Hirth 1908]，さらにそれをうけてテュルク説を強調したド・フロート [de Groot 1921: Teil 1] などがその代表者であった。

これに反して，漢族との同系統を主張したものは少なく，その代表者はフランスのアンリ・マスペロであった。また近年のチェコのプルーシェクも異系統説を鋭く批判し，同系説を強く主張した。つまりプルーシェクによれば，漢族諸国の縁辺に住んでいた狄やその他の蛮族は，後に胡と呼ばれるようになったものを除くと，漢族とは基本的に同系統であったらしい [Průšek 1971: ことに9–17, 209–228]。つまり基本的にはマスペロの考えが正しかったというのである。そこでマスペロ説をここで少し詳しく紹介しておくことにしよう。

マスペロは，歴史の曙のころ，中国文明は黄河平野の二つの地域に分れていたが，この二地域を分断していたのは蛮族であったと言っている。つまり地域の一つは黄河下流であって，山東半島の北と南の狭い地域で海，つまり直隷湾（渤海）と黄海に接していた。西は西高原の壁と，黄河が河南に注ぐ前の狭い水路を越えなかった。第2の地域は第1の地域よりはるかに小さく，南の華山と北の陝西高原の間の，渭水と洛水が黄河に流れ入る小平原である。

この両地域とも蛮族にとり囲まれていた。しかしこの蛮族という名称を誤解しては

いけないとマスペロは言う。たしかに極北の無終と代の戎はツングースとフン（匈奴）だったように思われ，ことによると歴史時代まで続いた中央地域の陸渾やその他の諸部族もそうであったらしい。同様に南方では，蛮諸族は蜀（四川）のチベット人や巴そして恐らく西南部の楚と密接に関係していると考えられて来た。

しかし，蛮族の大部分，つまり狄，戎のほとんどすべて，徐，淮そして楚，呉，越の基本的住民さえもが，小さな漢族系部族集団であったことは確かである。彼らは山や沼地や，森のなかで遅れた状態にとどまり，平原の住民の文明化の運動から超然としていたのであった。同様にギリシア人はテッサリア人とマケドニア人を野蛮人と見なしたのであった。夏を野蛮な隣族から区別していたのは，恐らく社会的な相違以上のものではなかったろう。もっともこの相違は，文字，政治組織，物質的進歩によって平原住民が山地民に優越することが一層明瞭に証明されるにつれて，ますます明白になってきたのであるが。この相違は，『左伝』が前6世紀［襄公14年＝560年］のある戎の首長［戎子名は駒支］のものとしている言説にかなりうまく要約されている。「我々の飲物，食物，衣服は漢族の諸国家のものと相違している。我々は彼らとは礼儀の品のやり取りもしません。彼らの言語と私たちの言語は互いに通じません」[Maspero　1927: 10–11, 1978: 8–9]。

そしてマスペロは，「ヨーロッパの歴史家の大部分が，いわゆる蛮族をすべて，漢族とは全く違う起源だったという説に従っていたのが，私には何故だか理解できない」としてヒルトやド・フロートなどを批判した [Maspero　1927: 11, 1978: 383]。

もちろんマスペロ説には今日から見れば弱点がある。これは基本的にはマスペロ説に賛成のプルーシェクも指摘しているところである。つまり狄などは，歴史の始めの時から，ずっと中国内部で同じところに住んでいたというマスペロの考えは，今日ではそのままの形で支持することはできない。文献に記された分布はたびたびの移住の結果と見るべきなのである [Průšek　1971: 14, 70–87]。

このようなマスペロやプルーシェクの説については，三つの点を指摘しておきたい。

第1は，たとえ言語系統は漢族と同一であっても，これら諸民族はそれぞれ異なった文化をもっていたし，また意識の上においても，自集団と他集団との区別があったに違いない。そしてエーバーハルトが利用した漢族の側からの民族区分も，大なり小なりこれら民族自身による区別に対応していたと考えられる。したがって，言語系統の問題は一応別にしても，エーバーハルトの試みたような民族分類は，それぞれの根拠もあるし，また文化史的，民族史的研究にとっても役に立つものである。

第2は，そもそも個々の民族の言語が何であったかについては，マスペロ説もプルー

シェク説も充分の説得力をもっていない。それら言語の所属は言語学的にもまだ問題が決着していないものが多い。また古代に関しては資料が限られていることから言っても，最終的に決定することが不可能な場合も少なくないに違いない。したがって，マスペロやプルーシェクのように，周辺民族の多くを漢族と同系統と断じたのも，決して決定的なものとは言えないのである。それどころか，近年の言語学的研究の大勢は，後述のようにむしろこれら周辺諸民族の言語が非漢語だったことを明らかにしつつあるのである。ことにそれは南方の諸民族について著しい。

第3は，この点に関して残念なことに，プルーシェクの研究はもっぱら北方諸族に関するもので，南方諸族については論じていないことである。マスペロの場合，楚や呉や越を漢族集団と見なしている。春秋ごろにはこれら諸国の支配者層が文化的にまた言語的に大きく漢族化していたことは疑いないが，近年の中国学者の研究を見ても，元来は漢族とは系統を異にしていたし，また一般民衆に関しては，一般的に言って支配者層よりも漢族化が遅れていたことは，充分考えられることである [たとえば陳・蔣・呉・辛　1988参照]。『戦国策』の燕策を見ても，戦国末，漢初の越人のところでは，まだ漢語が通じなかったらしい。

そして中国において南北の言語が，かつては別系統のものであったろうことは，橋本万太郎が，基礎語彙，統辞構造などから詳論したところであった [橋本　1978, 1981]。

このようにして，マスペロやプルーシェクの批判にも拘らず，私は基本的には中国には古代以来，言語系統，文化の形態を異にするさまざまな民族が住んで来，古典に現われる異族はやはり大部分は，言語的，文化的にも漢族と相違していた可能性を重視すべきである，という立場をとっている。

エーバーハルトは，さきに見たように中国周辺の諸民族を分類し，さまざまな民族群を設定した際，それら民族群の語族所属を考えた。そのなかで西方群の諸民族が，大体においてチベット＝ビルマ語族に属するという考えなどは，今日見ても変更の必要はないであろうが，越やヤオがオーストロネシア系だというような疑わしいものもあった。エーバーハルトは言語学者ではなかったから，これら民族の語族所属を決めるに当って，言語資料の言語学的分析をしたわけではない。現代の言語分布の状態や，文化内容からの推測にもとづく，かなり直観的なものであったと言ってよい。

そこで当然，専門の言語学者はどういう考えなのかが問題になる。ここでは日本の橋本万太郎の説と二人のアメリカの言語学者，ベネディクトとプーリーブランクの説を紹介しよう。

## b. 橋本万太郎

橋本万太郎によれば，現代中国語の諸方言は次のように分類され，分布している。

（1）　北方語

北京を中心として，揚子江以北の漢族居住地，湖北省の大部分，四川省，雲南省，貴州省，湖南省の西北部で話されている。(a) 東北方の《華北方言》，揚子江下流域の《下江方言》，西北方の《西北方言》，近世になって植民の行われた《西南方言》の，最低四群にわかれる。分布の距離にくらべて同質性がよく保たれている。「文法構造は，修飾語をできるだけ被修飾語のまえにおこうとする。いずれもアルタイ語式の構造で，北方語の特色をなす」。

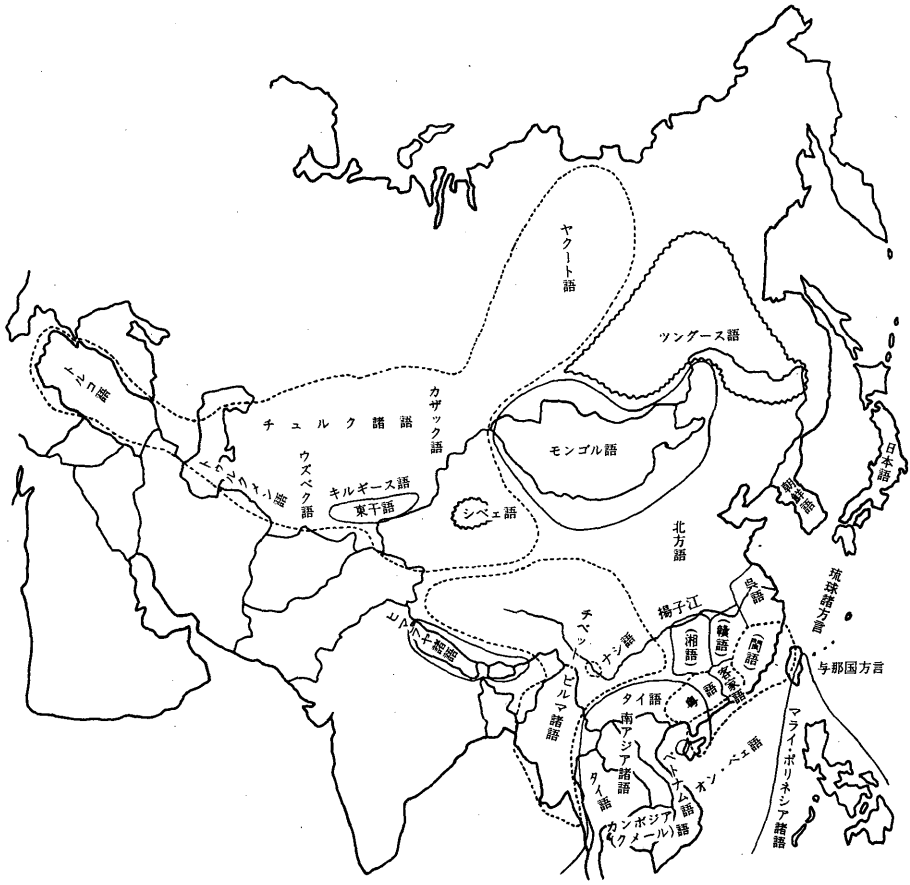


図3　中国と周囲の言語 [橋本　1981]

（2）　呉語

蘇州方言を代表として，揚子江河口以南から海岸ぞいに江蘇省，浙江省で話されている。湖南省で話されている湘語は，客家の南下によって呉語地区から切り離されたものであろう。湖南省北部は北方語の要素が強く，南部にしか湘語らしい方言は残っていない。

「音韻の特徴は，子音に有声音――無声無気音，無声有気音の3項対立をもち，複母音をできるだけさけて単母音とする傾向である。声調は，子音の有声――無声の対立とおぎないあうところがあるため，4種類に帰結できる方言がおおい。ぜんたいとして，音韻の面でも文法の面でも，かつて，この地域のちかくにすんでいたとみられるミャオ語やヤオ語の構造をおもわせるところがおおい」。

（3）　客家（はっか）語

広東省東北隅の梅（メイ）県（ニン）方言を代表として，華南一帯（台湾も含む）の山間部にひろくひろがっている。中心は広東，福建，広西，江西の四省境界部である。この地域を北方にむすぶ江西省の方言は，贛（こう）語として，客家語から切り離されることが多いが，「じっさいには，[客家語と] 北方との過渡的な方言の印象をうける」。

「文法構造のうえでは，かなり北方語の特徴をのこしておりながら，音韻組織は，いわゆる南方型で，声調は7種から6種。音節末尾に，pやtやkのような閉鎖音をもつ入声をもつ。子音は，呉語湘語の有声閉鎖音，破擦音にあたるものが，ほぼすべて無声有気音になっているところが，いちばんめだつ特徴である」。

（4）粤（えつ）語

広州や香港で話されているいわゆる広東語を代表方言として，広東，広西に分布する。

「方言によってかなりのちがいがみられるが，いわゆるカントン語は，母音の長短のちがいや，入声がそれを条件に二分されるなど，広義のタイ語族，じっさいにはすぐとなりではなされているチョワン［チワン］語そっくりの音韻組織をもち，文法構造も，できるだけ修飾語を被修飾語のあとへおこうとするタイ型である。声調は漢族の言語のなかでいちばんおおく，9種，なかには10種になるものもある。ただ歴史的に，はやくから北方との密接な関係ができたので，その文語をみると，かなり北方語式の特徴がみられる」。

なおこの粤語の分布領域の広西には，湘語に近い方言も話されている。

（5）閩（びん）語

福建省から台湾省，広東省東北隅から雷州半島をへて海南島にかけての海岸部で話

されている言語の総称である。海岸沿いは，割合早く南下した閩東方言と比較的奥地で話される閩西方言に分れる。閩東方言はさらに福建北部の閩北方言，南半から台湾，広東沿岸部，海南島を含む閩南方言に分けられる。

「閩方言には，華南土着語のかげがもっともふかく影をおとしており，北部の方言にミャオ語やヤオ語，南部の方言にチョワン［チワン］語，海南島の方言はロイ語（リイ語）やオンベ語の構造を念頭におかないとよくわからない特徴がみられる。子音の対立は本来2項であるが，鼻音が有声破裂音になっている方言がおおく，またほかの方言との対応も考慮すると3項，4項にもなるものがある。声調は7種から6種ある。語彙に漢語らしくないものがかなりめだつ」[橋本　1980: 10–12]。

この橋本の方言区分を見てまず感ずることは，これら方言が生態学的領域とかなり重なることである。

つまり北方語は華北平原，黄土高原，山東・遼東・熱河，満州平野，赤盆地，西南台地を占め，呉語は主として揚子江平野それに南揚子江丘陵の一部，湘語は南揚子江丘陵，閩語は東南海岸，贛語と客家語は南揚子江丘陵，粤語は両広丘陵，というぐあいである。これもまた生態学的要因が，中国における地方的な諸伝統の形成に大きな役割を果したことを示している。

第2は，南方の諸方言のほとんどに非漢語の基層の存在が認められることである。これら基層語は，それぞれの地域に存在していた辺境諸民族ないし地方諸文化の言語系統を考える上で有力な手がかりを提供するものである。

つまり，呉語と湘語はミャオ＝ヤオ語の基層が考えられる。「呉語には，かってこの地方にいたとかんがえられるミャオ（苗）語やヤオ（傜）語のはなしてのいぶきがつよくのこっている」[橋本　1980: 9，なお 1981: 349–352を参照]。これからすれば，古代の呉越と楚とは基本的には同一言語であって，それはミャオ＝ヤオ語に近いものだったということになる。これはエーバーハルトが越文化の基本的な構成要素をヤオ文化に求めたのとうまく合っている。しかし，あとで述べるように古代越語の系統については，これと異なる有力な学説も存在しており，問題はまだ解決されたとは言えない。

次に粤語については事態ははるかに簡単明瞭である。

「粤語は，文化的な語彙だけ中国語化したタイ語――もっと正確にはチョワン［チワン］語――みたいなものだ」[橋本　1980: 9]。

辺境諸民族のなかでチワン諸民族が粤語の基層語の担い手だったのである。

基層語が南方系であることは示唆されていても，いかなる語族かは明示されていな

いのは閩語と客家語である。閩語は「華南土着語のかげがもっとも影をおとしており」[橋本　1980: 11] と記されているだけで，あとは北端ではミャオ・ヤオ語的性格，南端ではチワン，ロイ，オンベ的な性格というぐあいに，それぞれその地の言語との接触の結果は示唆されているが，本体の正体がはっきりしていないのである。ただし，閩語の分布が東南海岸を中心としており，海岸沿いに南進したことは大いに注目してよい。つまりそれは閩語の担い手の海洋的性格を物語っているからである。もしそうだとすれば，閩語の基層語はオーストロネシア語と何らかの関係になかったか，という疑問が生じてくることを，ここに記しておきたい。そして閩語の本拠に接する台湾は近年オーストロネシア語族の原郷に擬せられているのである [Bellwood　1984 など]。

なお閩語に関しては，鄧曉華の興味深い考察があることをつけ加えておきたい。彼は閩語は古漢語と越語が混合した一種の《方言》だとしており，原南島語の語彙を多く保存していると論じる [鄧　1993: 194–204]。ただ彼が原南島語と言っているのは，むしろこの次に紹介するポール・ベネディクトのオーストロ＝タイ語に相当するようである。

客家語と贛語は，かつて呉語と湘語を東西に分断したものであるが，音韻組織が南方語的なことは認められており，また山地に分布するにも拘らず，基層語がはっきりしないのは，もどかしい感じがする。分布から見て，この基層語がミャオ＝ヤオ語と何らかの関係はなかったかと尋ねたくなる。これは客家の形成について興味深い問題となるかも知れない。

第3は，このような方言の基礎にある非漢言語が，それぞれの地域において先史時代にまで遡る可能性があることである。この問題について極めて示唆に富むのは，鄧曉華の試みである。彼は，新石器時代に萌芽をもち青銅器時代に繁栄した華南と東南沿海地区の印紋陶文化の下位区分と南方の諸方言区域とを比較し，印紋陶文化の地域区分と，閩，粤，呉，湘，贛などの方言区分が相符合することを指摘した。印紋陶の7個区は南方漢語の7種方言区域に相当する。南方の住民は農耕を生業とし，平時の活動区域は周囲100キロの範囲内である。先秦時代にできた言語区域は，その後北方からの移民の言語との交流と融合が進行し，今日の南方諸方言ができたのだという [鄧　1993: 205–208]。従うべき見解である。

最後に第4として，橋本の方言研究では，北方語の分布地域において，いくつかの地域区分はあるものの，それらには果してそれぞれ基層語があるか否か，の問題が取り上げられていない。恐らくこれは今日ほとんど痕跡を残していないからであろう。

しかし，これは大変残念なことである。それは第1に，北方語の諸方言がそれぞれの生態学的領域に対応しているからである。東北方の華北方言は，華北平野，山東，遼東及び熱河に対応し，揚子江下流域の下江方言は揚子江平野に，西北方の西北方言は黄土高原に，そして近年になって植民の行われた西南方言は，赤盆地と西南台地にそれぞれ対応する。このような対応は，それぞれの方言が相異なる生活様式の伝統と結びついていることを示唆している。さらに，エーバーハルトの『辺境諸民族』や『地方諸文化』の成果からすれば北方語の地域にも，かつてはいろいろな系統の民族が居住していたと思われるからである。

いずれにしても，橋本説は，まだ充分でない点があるものの，現代中国語の諸方言に非漢語的基層が存在した可能性を指摘して，そのいくつかについては重要な示唆を与えた。これはエーバーハルト説を補い，裏付けをする重要な貢献である。

ここで，橋本説についての検討を止めて次にアメリカの言語学者ポール・ベネディクトの説に進むことにしよう。

### c.　ポール・ベネディクト

中国語はシノ＝チベット大語族に属し，そのなかでチベット＝ビルマ語族と並ぶ大きな語群である。しかし，シノ＝チベット語以外の構成要素も，橋本説に見るように，中国語の形成に参与してきた。このような非シノ＝チベット系の言語として，ベネディクトはオーストロ＝タイ語を挙げた。つまりタイ語，カダイ語，インドネシア語などを包括する彼が設定した大語族である。そして彼によればオーストロ＝タイ語と言ってもその祖語ではなく，その後のある未知のオーストロ＝タイ語（オーストロ＝タイX語）から一連の物質文化に関する語彙が中国語に入り，受容されたというのである。彼が列挙した語彙は，鶏と卵，馬，鞍，騎乗すること，象と象牙，豚と兎，牛と山羊ないし羊，蜜蜂，菜園と肥料，犁，臼，種子，播種，箕であおること，稲，サトウキビ，バナナ，ココ椰子の実，生薑，辛子，さまざまな料理法，さまざまな金属，ボート，筏，櫂，炉，土器と焼きかまど，機織と編み，篭と袋などである[Benedict　1967: 317–318, passim]。

ベネディクトがこれら要素を与えた側がオーストロ＝タイ語で，受け取った側が中国語だと考えた理由は次のとおりである。

「一方においてシノ＝チベット語には［これらに］対応する語彙がなく，他方ではオーストロ＝タイ語中には存在すること，おまけにさまざまな種類の重要な音韻論上の証拠が加わって，中国人が与え手でなく受け取り手であること，また中国人が

自分たちよりも技術的にはるかに優れた言語（および文化）から借用したこと，が明確になる。これらの言語上の獲得物は中国語に《帰化》してから後に，多くの場合，東南アジアのさまざまな群に《逆借用》back loans の形をとって《転出》された」[BENEDICT 1967: 278]。

言語学的論拠は専門家の評価に委ねることにして，文化史的に見てベネディクト説を全面的にそのままの形で受け入れることは困難である。つまり，彼が南方のオーストロ＝タイ X 語から北の中国語に入った語彙（およびそれに対応する文化要素）のなかには，馬，鞍，騎乗，羊，犁などが含まれており，我われの首をかしげさせるからだ。

しかし，他方ではオーストロ＝タイ語の分布領域に長江流域も含められていたとすれば，稲のように北上したと見るのが妥当な要素も含まれていたことになるのである。また本来湿気と木蔭のあるところの動物たる豚も，クサーヴァー・ゲッツフリートによれば，東南アジア山地あるいはその周縁で家畜化されたものと思われるといい，豚についてのベネディクトの言語学説も彼の説を支持するものと見ている [GÖTZFRIED 1980: ことに169]。

もしベネディクト説の主な部分が認められるとすれば，それは殷の言語に関しても示唆を与えるものであろう。いずれにしても，ベネディクトのオーストロ＝タイ語の構想は，まだ問題は多いが [REID 1984]，考慮に値する重要な仮説である。

### d. プーリーブランク

もう一つ紹介したいプーリーブランクの説は，古代の辺境諸族の言語についての概観的論文である。私はエーバーハルト説と比較しやすいようにするために，彼の論文とは順序を多少変え，北方，西方，南方の順序で紹介することにしたい。ただエーバーハルトが古代諸民族として別扱いした諸民族については，ここでは別扱いせず，それぞれの地理的位置に応じて，取り上げることにする。なお東方の諸民族は，南方諸民族のあとで取り扱いたい。

プーリーブランクによれば，全体としてのシノ＝チベット諸民族の中核地帯は仰韶新石器文化であり，漢民族は中原で発達をとげたその東部の枝であって，山東と淮河地方のオーストロアジア的な夷諸文化の影響を吸収したのであった [PULLEYBLANK 1983: 423]。

次に北方の諸民族について。

まずエーバーハルトの朝鮮諸民族群や粛慎諸民族に相当する諸民族から見よう。

プーリーブランクは周代の貊の言語は何も資料がないことを断った上で，貊という名は古代中国語では閩や苗と同様に *mr- クラスターをもつ語であり，頭韻の類似のゆえに，『詩経』では苗と貊を一組にしているのかも知れない。しかし，他の証拠がなければ貊はミャオやヤオと親縁だという説は脆弱である。むしろ北へのつながりを求めるほうがもっともだ [PULLEYBLANK 1983: 445]。

このように貊の位置づけは明瞭を欠いているが，他方，挹婁はプーリーブランクによれば，おそらくツングース系である [PULLEYBLANK 1983: 446]。

プーリーブランクは，ブルーノー・レヴィン [LEWIN 1976] が唱えた，日本語，朝鮮語はともにオーストロネシア的基層の上に，アルタイ語がかぶさったという説に賛成し，このアルタイ語上層の源泉は，貊だったと同定できるかどうかが面白い問題だと考えている [PULLEYBLANK 1983: 446]。

プーリーブランクは，狄については決定しかねている。

「古代狄は，しばしば戎と対にされ，戎の特徴の若干を共有しているらしく，チベット＝ビルマ語族だったかも知れない。狄は東胡と結びついていて，アルタイ語族だったかも知れない。それとも全く別の民族的・言語的系統だったかも知れない。私は今のところ，この問題を解決する方法を全く知らない」[PULLEYBLANK 1983: 448]。

狄ばかりでなく，匈奴の言語系統も難物である。プーリーブランクは，匈奴語をテュルク語やモンゴル語に結びつける証拠はないと言い，リゲティ [LIGETI 1950] が初めて指摘したシベリアのケット（Ket）語と同系という可能性を重視している [PULLEYBLANK 1983: 451]。

プーリーブランクによれば，東胡，鮮卑，烏桓はおそらく原モンゴル族である [PULLEYBLANK 1983: 446, 452–454]。しかし，彼らは前4世紀になって中国に知られるようになったに過ぎない [PULLEYBLANK 1983: 460]。

プーリーブランクによれば，古代中国人に知られていたテュルク語諸族は，丁零，堅昆，薪犂，烏揭など南シベリアの諸族で，漢代から知られるようになったに過ぎない [PULLEYBLANK 1983: 454–456, 460] 。

このような見方からすれば，エーバーハルトが，北方諸民族におけるテュルク系要素とモンゴル系要素を重視しているのは，大幅な保留ないし訂正が必要であろう。ことに狄と匈奴の言語学的地位はなお確実でないのである。

そしてエーバーハルトの体系においてはインド＝ヨーロッパ語系の民族や文化は北

方諸民族のうち，その他の部に入れられ，軽く取り扱われている。しかし，プーリーブランクによれば，前2世紀のはじめまでに，新疆北部，東部のオアシスはトカラ語を話す都市国家によって占められ，それらに親縁の言語を話す遊牧民（月氏と烏孫）は甘粛と天山にいた。彼らがやって来た時代はまだ決定できないが，遅くとも前2世紀にはすでに来ていたと示唆されている。彼らが中国文明生誕に当って西方から文化的影響を伝達した仲介者であったらしい [PULLEYBLANK 1983: 460, cf. 456–459]。

プーリーブランク説はまだ決定的でないが，それでも私もまたインド＝ヨーロッパ系の民族と文化を，エーバーハルト以上に重視すべきであると考えている。ことによると殷代に出現した馬にひかせる戦車（チャリオット）をもたらしたのも彼らであった可能性も考えられるからである。

次に西方諸民族について。

プーリーブランクによれば，『孟子』30に，周の文王を西夷の人と呼んでいるのは正しかった。周は元来は戎であったとしても，殷を征服する以前に，漢化の過程を済ませていたに相違ない。この文化変容の結果，周は戎だというアイデンティティを失い，固有の習俗と言語を保存し，戎を敵視したが，殷ほどひどく戎を取り扱わなかったらしい [PULLEYBLANK 1983: 419–421]。

プーリーブランクによれば，蜀という名が殷から戦国の間に，潼関から四川に移っているのは，この千年の間にチベット＝ビルマ語族の南遷があったことを示唆する。

中国の歴史家が示唆しているように，漢代の《羌》諸族が比較的最近にもっと北から来たのだとすると，殷代にはチベット＝ビルマ語族は黄河の水源よりも大して南には侵入していなかったらしい。考古学的証拠もこのような結論と合うようだ。張光直によると，戦国時代に漢民族が四川に浸透する前は，四川東部の巴は楚と密接な文化的な親縁関係を示し，西方の成都北方では，同じ時代の雲南の文化（ドンソンと滇）と共通する要素があった。四川北西部では，他方，理番と甘孜の遺跡が，北方との文化的関連と，同時代の中国からの影響とを示している [PULLEYBLANK 1983: 422–423]。

こうして西方辺境諸民族はチベット＝ビルマ系であって，エーバーハルト説は基本的に裏書きを得たことになる。しかし，プーリーブランクが考えるようなチベット＝ビルマ語族の南下説を認めると，地勢的にはチベット辺境地がその本来の居住地域であり，西南台地への進出は新しいと考えるべきであるように思われる。

しかし，問題はまだ最終的に解決されたとは言えない。

次に南方の諸民族を見よう。

プーリーブランクが指摘したように，楚の文明は長江中流で，蛮諸族の真只中で，前一千年紀の間に興隆した。楚は言語上も漢族となり，ついには相争う中国語国家の間にその地位を占めたが，元来は蛮の起源であったことは，自他ともに認めることであった。いくつかの伝説の言うように，北方から来て建てた国なのか，それとも拡大する漢民族の圧力への自発的な地域的な反動だったのかも知れない。いずれにしても，国家形成と文字を獲得したのは，中国語の文章語と，また結局は口語も採用したということを意味していた。すると今度は楚はその蛮としてのアイデンティティを捨て，その周囲の漢化していない蛮を《野蛮人》として取り扱い始めた。これは周人を戎から区別した過程と同じだ [PULLEYBLANK 1983: 427]。

プーリーブランクによれば，巴は漢代においても非漢系部族民として東南四川にいたが，『後漢書』は彼らを蛮として分類しているから，チベット＝ビルマ語族ではなくて，ミャオ＝ヤオ語族だったに違いない [PULLEYBLANK 1983: 422]。

プーリーブランクは蛋民の元来の言語については何も分っていないという。現代の中国人著者の何人かが，蛋民をミャオ＝ヤオとして分類しているのは，別に強力な証拠があるわけではない [PULLEYBLANK 1983: 428–429]。

プーリーブランクは，ポール・ベネディクトが，原オーストロ＝タイが，かつて東南アジア，華南における文化的指導者であり，またその言語が中国語中の古い文化語彙の多くのものの源泉だったという説に反対して，むしろオーストロアジア語（モン＝クメール）を媒介して，南からの影響が中国文明の形成に加わったのだと考えた [PULLEYBLANK 1983: 436]。

プーリーブランクは，福建の古名の閩は蛮の同語の異形かも知れないという。そして浙江からベトナムまで海岸沿いに分布していた越人は恐らくオーストロアジア語族だったが，オーストロアジア語族よりも先に住み，恐らくまだ内陸に住んでいる原住民は，蛮（ミャオ＝ヤオ）が東に伸びたものだったかも知れない [PULLEYBLANK 1983: 428]。呉の言語も越と同じくオーストロアジア語だったろう [PULLEYBLANK 1983: 440]。

さらに彼は，メイとノーマンが閩方言中の多くの口語語彙がオーストロアジア起源だという説，つまり福建の前漢族系住民にオーストロアジア的基層があるという説を重要視している [PULLEYBLANK 1983: 439–440]。

次に東方の諸民族について。

プーリーブランクによれば，充分証明はできないが，山東と淮河地域の夷の言語は，呉や越の言語と，したがってひいてはオーストロアジア語と関係があったらしい。その場合は，夷語がオーストロアジア語と中国語の間の最古の接触の源泉として蓋然性が高いということになる [PULLEYBLANK　1983: 442]。

以上のプーリーブランク説も，多くの点でまだ決定的なものではない。何よりも気になるのは，貊の言語や，巴の言語についてのように，言語上の証拠なしに推測をしている部分があるからだ。そのほか，語族の形成についても，まだまだ異説の余地があることが指摘できる。たとえば，プーリーブランクはチベット＝ビルマ語族の南下説を提唱したが，文化地理学者の諏訪哲郎はチベット＝ビルマ語族の歴史について，次のような大きなパースペクティヴを提出している。

「こんにちのチベット・ビルマ系民族分布域の中心よりやや南の地帯では，プロト・チベット・ビルマ語とでも称する言語を話す人々が，焼畑ないし常畑農耕を行っていたが，この地帯の北部では北方から流入してきた牧畜文化を有する人々との接触によって，プロト・チベット・ビルマ語を基礎として北方の牧畜民の言語の影響を受けたチベット・ビルマ語が成立した。それと共に経済的・文化的な活性化が起り，南の農耕民と北の牧畜民の融合体であるチベット・ビルマ系民族の経済的・文化的な力が拡大し，南北にその影響を及ぼしていった。ただし，サルウィン川上・中流域の山間地やナガランドにまではその影響力は及ばず，乳利用文化も伝わらなかった。一方，チベット高原の北部や西部の牧畜中心地域にも，チベット王国の勢力拡大に伴ってチベット語が浸透し，チベット・ビルマ語圏に含まれるようになった，という想定である」[諏訪　1988: 3]。

いずれにせよ，少なくともエーバーハルトの時代と比べて問題点の所在がはっきりしてきたことは認められる。

また南方については，プーリーブランクはベネディクトに反対してオーストロ＝タイ語よりもオーストロアジア語を中国南部の古い言語として重視している。そして呉越の言語もオーストロアジア語かと考えている。しかし，それは断片的に残っている言語資料を分析した結果ではないらしい。その点からいって，中国の学者が，越語を残っている手がかりから見てタイ語に近いと考えているのは重要である [たとえば，陳・蔣・呉・辛　1988: 46–48]。そしてエーバーハルト説とは違って，越語は記録された語彙に関する限りオーストロネシア語とは関係ないことは安田尚道の研究以来明らかになってきている [崎山　1990]。

いずれにせよ，エーバーハルトがヤオや越をオーストロネシア語族と考えたのは，言語学的に見て支持しがたいものであることは明らかと思われる。

全体として見ると，プーリーブランク説は中国古代の辺境諸民族の言語について書かれた，もっとも包括的であり，またもっとも新しい研究水準を表す概観である。その点で，彼の研究は，エーバーハルト説の検討にとって極めて有益であった。

そしてエーバーハルト説と比べ，プーリーブランク説のほうが優れていると思われる相違点は，ミャオ＝ヤオ語族の独立性を認めたことと，漢語の前身が華北に早くからあったという考えである。

つまり，ミャオ＝ヤオ語は，他の語族と何らかの関係はあるにせよ，独立の語族として早くから存在していた蓋然性は大きい。したがって蛮の言語や楚の言語など，中央山脈地帯や南揚子江丘陵の古い住民の言語系統を考える場合，当然考慮してしかるべき言語である。またそれは，橋本の方言研究の結果ともうまく合う。エーバーハルトが，ヤオ諸民族をオーストロネシア語族としたよりも，より適切であろう。

次に華北に仰韶文化に遡る漢語の伝統があったと考えるのは，これから紹介する中国の田継周などの考えとも一致している。このような核となす民族群ないし地方文化をエーバーハルトが考えなかったのは，辺境諸文化から考察を進めるという立場の結果だったかも知れない。しかし，この核の問題を考えなかったのは，後述のように，私にはエーバーハルト説の大きな弱味であったように思われる。

## 6.　先史時代における民族分布

エーバーハルトがこの『中国辺境諸民族の文化と居住地』を著した1940年前後は，中国の考古学的研究はまだ幼弱な段階であった。したがって彼はもっぱら文献資料から古い時代における民族の分布を明らかにしようと努めたのであった。

このエーバーハルトの体系については，さまざまな研究者の批判があり，ことにチェコのプルーシェク [PRŮŠEK　1953, 1971: 11–13] のものがもっとも基本的なものである。しかしそれらの批判においても，中国古代にいくつもの地方文化があり，それらが中国文明成立になんらかの形で参与していたことは認められている。問題視されたのは，エーバーハルトが再構成した諸地方文化が，果して前三千年頃まで遡るほど古くから確立していたかどうかという点と，個々の地方文化の担い手の語族が何であったかについての二点であった [cf. FRANKE und TRAUZETTEL　1968: 29]。私もこのような批判は大筋において中っていると考えている。

そのうち語族については今検討を済ませたが，先史時代の諸民族については，どのように考えられるのであろうか？　新石器時代の段階において，中国の諸民族がすでにその前身を形成し，あるいは存在していたという考えは，歴史時代初期の状況から遡って考えてみれば極めて自然な発想である。そして近年における中国考古学の発達により，先史諸文化の分布状態が明らかになるにつれて，諸地方文化の存在も明らかになって来たし，それを通じて新石器時代の諸民族についても，一応の見通しを立てることが可能になって来ている。

そのような見通しの一つの試みを田継周が提出しているので，それを紹介することにしよう。

仰韶文化の主な分布領域は，陝西関中，河南の大部，晋［山西］南と冀［河北］南地区，東は河南と山東，安徽の交界のところに及び，西は甘粛，青海の交界のところに及び，南は漢水の中上流に至り，北は冀［河北］と内モンゴルの河套地区に及んでいる。この仰韶文化と黄河中下流の竜山文化の住民の形質と文化特徴から見て，一般にこれは後に夏族あるいは漢族と称される人たちの主要組成部分であると考えられる。

大汶口文化の主な分布は山東南部と江蘇淮北の地区で，東は海に及び，西北は黄河北岸に至り，皖［安徽］北や河南にも現われている。この大汶口文化と山東竜山文化の人たちは，後に東夷民族集団と呼ばれるものに属していたと考えられる。

馬家窰文化の主な分布は甘粛東部と，それに隣接する青海，寧夏地区で，南は川北に達し，西は玉門に及んでいた。彼らは後に西戎民族集団と呼ばれるものに属していた。

馬家窰文化の分布地域のなかには，この文化より後に斉家文化が存在していた。東は涇水，渭水の上流から始まって，西は湟水に至り，南は白竜江に達し，北は内モンゴルの阿拉善左旗に至っていた。この斉家文化も西戎民族集団の文化だったと考えられる。

河姆渡文化は浙江省寧波，紹興平原の東部地区にあり，この文化を承けて浙江毗連の太湖周囲に分布する馬家浜文化が現われた。馬家浜文化が越族の文化に属するなら，河姆渡文化は，古越族の原始文化に属するに違いない。

馬家浜文化や崧澤文化を承けた良渚文化は中国東南地区の印紋陶文化の一部である。そしてこの印紋陶文化はみなが古越文化に属すると認めている。

さらに閩江下流に集中している福建省の新石器文化と両広地区の新石器文化は，古越族の一部が残したものであろう。

内陸に入ると，大渓文化がある。湖北，四川，湖南三省の隣接地区に分布し，西は四川省万県に至り，東は湖北松滋に達し，中心の分布区は湖北省西南部の長江両岸に沿った地域である。この大渓文化よりも遅く，しかもこれと多くの共通点をもつのが屈家嶺文化であって，主な分布地域は湖北省の江漢平原で，北は河南省南陽地区に達していた。屈家嶺文化人も大渓文化人も後に南蛮民族集団と呼ばれるものに属していた。

北方に目を転じると，北は内モンゴルの烏爾吉木倫河流域に始まり南は河北北部に至り，東は遼寧錦州地区に至る紅山文化，内モンゴルの烏爾吉木倫河と西拉木倫河流域の富河文化，それに遼河流域の新楽下層文化がある。この三文化は互いに密接な関係をもち，民族の角度から見ると，大概は後に東胡と称された文化系統に属している。

さらに内モンゴル，黒竜江，寧夏のホロンバイル草原，松嫩平原，渾善達克沙漠，巴丹吉林沙漠，河套地区に分布し，新疆やチベットの一部に及んでいる細石器文化があるが，これは後に北狄民族集団文化と呼ばれるようになったものである [田 1990: 25–32]。

この田継周説にもまだ薄弱なところがある。たとえば福建や両広の新石器文化もすべて古越族に帰していて，《古越族》という概念を大変包括的に用いている。しかしこのような分類は，問題があって，後述の蘇秉琦らのように，両広の新石器文化は江南のものとは別個のものと見なすべきものであろう。また呉綿吉 [1994] も福建の印紋陶文化を閩越の前段階と見なしている。それでも全体として見れば，この田継周の説は，初期歴史時代の民族分布から見て，大筋においては妥当なものではないかと思われる。

この田継周の説と比較してみると，エーバーハルトの構想には支持できる部分と改訂を必要とする部分とがあることが明らかになってくる。

先史中国には，多くの地方文化があり，その多くが歴史時代のさまざまな系統の民族群と結びつくという基本的な認識は，エーバーハルトの構想と一致する。また具体的に，個々の民族群についても，東夷，西戎つまりエーバーハルトの西方辺境諸民族，古越族つまりエーバーハルトの越，南蛮つまりエーバーハルトの南方辺境諸民族の一部，東胡や北狄つまりエーバーハルトの北方辺境諸民族の一部といった諸民族群の祖先が，すでに先史時代に存在しており，群として把握できる状態にあった，というのも，大筋においてエーバーハルト説を裏書きするものと言ってよい。

ことに近年においては，中国人学者のあいだにおいても，中国文明の多元論が勢をましてきている。徐朝龍によれば，

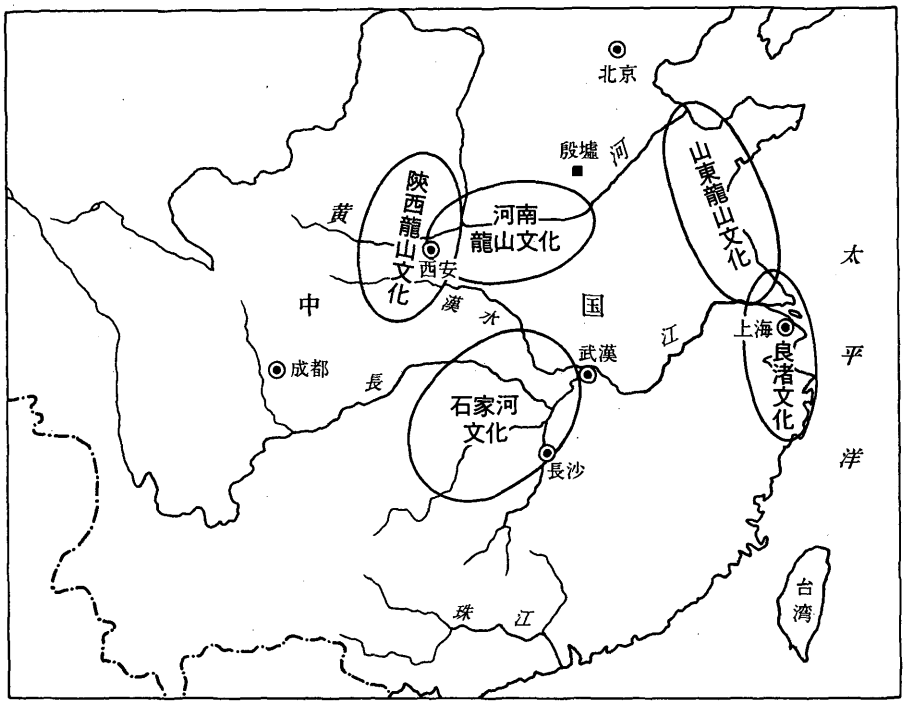


**図4**　夏文明前夜の黄河と長江流域の諸文化 [徐　1994]

「即ち，中国古代文明は黄河流域で一元的に成立したものではなく，それぞれ「区，系」をもつ複数の文明圏として各地で「多元的に」発生して並存し，それが次第に集約され，一つの大文明としてまとまってゆく，という道をたどっていったのだという意見である」[徐　1994: 9]。

このような見方の代表的なものは蘇秉琦（へいき）らの区系類型理論であって，中国新石器文化の6大区系として次のようなものを挙げている（地図は蘇，殷1984にもとづき，中村慎一が作図）。

1　陝西，河南，山西境界地区

2　山東および周辺地区

3　湖北および周辺地区

4　長江下流地区

5　鄱陽湖――珠江三角洲地区

6　長城地区 [蘇・殷　1984; 中村　1994: 24]

そして長江下流の良渚文化が，中原の夏王朝の成立にどのようにかかわっていたか

についても，具体的な推論が行われるようになっている [徐　1994: 13–16]。

こうして，田継周説ばかりでなく，中国考古学の動向は，エーバーハルトの構想と同じ方向を指すように変わってきつつあるように思える [なお，鈴木　1994: 28も参照]。

しかし，エーバーハルトの構想と大きく相違する点もある。それは何よりも漢族の基礎となるべきものが，すでに先史時代から華北にいたという点である。エーバーハルトの体系では，さまざまな地方文化がより集まって中国文明を形成するに当って，はじめから中核となる漢族がいた，という考えに欠けていた。しかし，何か核心となるべきものがあったほうが，漢民族形成を考え易いし，田継周の提示した証拠ももっともである。しかし，上に紹介したエーバーハルトの研究手続きからすれば，《漢族文化》という地方文化を再構成するためには，《漢族文化》の一部が辺境民族ないし辺境文化の形で捉えることができなければならない。しかし，それはできなかった。そこでエーバーハルトは《漢族文化》を地方文化としては設定しなかったのである。しかし，今日では考古学的与件に留意して，華北における一つの地方文化として，漢族文化を想定し，それに周囲のその他の諸地方文化が影響を及ぼしたと考えるのが良

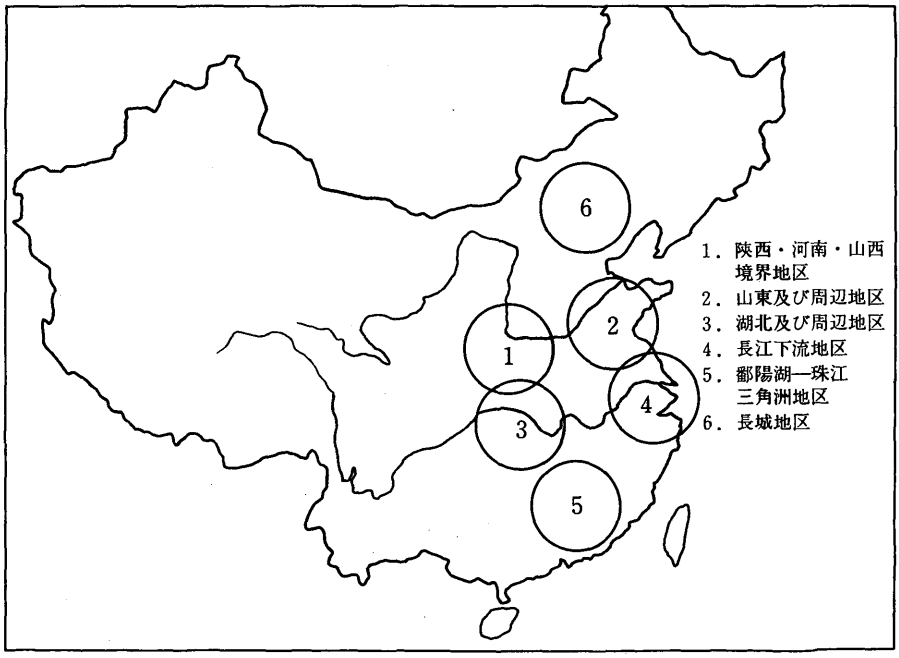


**図5**　中国新石器文化の6大区系 [中村　1994]

いのではないだろうか？

またエーバーハルトの構想に対して改訂の必要を考えさせるのは，東夷文化や越文化である。たとえば前五千年に遡る河姆渡の稲作文化があり，水稲栽培が長江中下流を中心として発達したことを考えると，越文化をエーバーハルトのように二次的に形成された比較的新しいものと見ることは困難であろう。越文化は一次的な原基的な地方文化と見るべきであろう。ただ越文化は山地，平地，海岸というようにさまざまな生態学的ニッチにまたがっているので，当然これらニッチへの適応の結果，山地民的越文化，平地民的越文化，海洋民的越文化というべき亜文化が早くから形成されていたことは充分考えられる。その意味では，エーバーハルトが越文化を水稲栽培のタイ文化と，焼畑耕作のヤオ文化の混合の所産と考えたのももっともである。

なお蘇秉琦らが，長江下流地区と，鄱陽湖・珠江三角洲地区とを区別したのは，生態学的に見ても，前者は東南海岸地帯，後者は両広丘陵を主な領域としているし，またエーバーハルトの民族分類からいうと，前者は越諸民族文化，後者はチワン諸民族文化の前身ということになるから，大変興味深く，示唆に富んでいる。

東夷についても，エーバーハルトのように後の越諸民族と同一であるというのでなく，たとえいろいろの共通性はあっても，越とは別個の民族であって，その区別は古く先史時代に遡ると見るのが適当であろう。

## 7. 結　　語

エーバーハルトの『辺境諸民族』は，まだ関連研究が進んでいない段階で試みられた，一個人による資料の集成，分析，綜合の大きな試みである。このすぐ前の時期に著された，そして彼が参照していない林惠祥の『中国民族史』[林　1936] と比較すれば，いかにスケールが大きく，また着想に富んでいるかが理解されよう。

彼の学説を理解し，弱点を知るばかりでなく，すぐれた着想を理解することは，たんなる学説史的興味をこえた，中国民族史の重要な問題である。そこで私は生態学的領域，語族所属，先史文化とのつながり，という三つの視角から，エーバーハルトの構想を検討して来た。訂正すべき点，検討を要する点はいろいろあるが，全体として見れば，厖大な数の辺境諸民族を大きく整理し体系化したことは，何と言っても彼の功績である。ことに大小の民族群は，それぞれ異なった文化ないし生活様式の伝統，あるいは生活様式を表わしているという彼の見方は，林惠祥などには見られない歴史民族学的なものであった。そしてエーバーハルトはそれぞれの群，ことに小群の特徴

的な文化内容を明らかにすることに努めた。このような見方，また彼が再構成した文化内容は，その後の研究に手がかりと出発点を与えるものであった。北方，西方，南方という大きな区分，さらに南方辺境諸民族においては，彼がヤオ文化と呼んだ焼畑耕作文化とタイ文化と呼んだ水稲耕作文化という二つの大きな文化伝統の存在することの指摘などは，発表された当時においては，新しい大きな見通しを提示したものであった。

また彼が巴文化に注目したことは，最近の考古学の成果を考えるとそれが卓見であったことに驚かされる。そもそもエーバーハルトの基本的な構想，つまりさまざまな地方文化が中国文明の形成に参与したという構想自体が，近年の考古学上の考えを先取りしているのである。

ただその場合，中国文明形成の中核となるべき中原の地方文化の存在に気づかなかったのは，彼の説の欠点であった。

そして彼の仮説のうち，必ずしも我われを納得させないものは他にもある。しかしそれは常に単なる欠陥ではない。たとえば越文化の形成の議論なども，どこに問題点があるかを考えさせる手がかりを提供しているのである。

他方においてエーバーハルトのまとめ方で物足りないのは，同一民族，あるいは民族群の文化が歴史的に変化して行ったことを捉えにくくしていることである。その点では，文化内容の分析には立入っていないものの林惠祥の『中国民族史』では，たとえば第14章苗猺系では，総論につづいて，夜郎，漢代の南蛮＝武陵蛮，六朝時代の南蛮＝荊雍州蛮，唐，宋時代の南蛮＝猺族，元，明，清時代の苗猺族，近代の苗猺族というぐあいに，7節に分けて時代別に変化をあとづけているのである。

もちろんエーバーハルトもそれぞれの民族や民族群が時代的に変化したことを無視しているわけではない。たとえば南方辺境諸民族のなかの白蛮語民族の文化については，チワン文化と近い関係にあるタイ文化であるが，一部は烏蛮によって重層され，あるいはオーストロアジア語族と接触した結果，本来のチワン文化からは逸脱したのだと論じている [EBERHARD　1942a: 326]。

このように彼は辺境諸民族文化相互間の影響による変化に大いに注目しているが，資料を年代的に配列していないので，説得力が弱い結果になっている。また彼は辺境諸民族文化相互間の影響を考える場合，越や楚のように国家を形成した文化が，周囲の諸族に及ぼした影響の問題，そして何よりも漢民族との接触を通じての中国高文化の影響の問題が等閑に付されているのは，彼の研究の大きな限界なのであった。

最後に，中国辺境諸民族の文化を考える場合，これを，あるいはその大部分を，い

かなる概念で捉えることができるか，という問題に触れておきたい。

つまり，エーバーハルトの研究で批判すべき点の一つは，中国高文化の影響が周辺民族に及んだことを充分考慮に入れないで，個々の民族の設定とその文化内容の再構成を行ったことである。ことに『辺境諸民族』における西南部や華南の諸民族の資料は，大部分，唐代以後のものであり，なかには近代のものもある。これは，中国高文化が成立し，その影響を周囲に及ぼし出してから後の時代である。したがって，これら西南や華南の諸民族の文化は，大なり小なり中国高文化の要素を受容していたり，あるいは高文化の影響下に発達をとげたものに違いない。

かつてアメリカの人類学者アルフレッド・ルイス・クローバーは《亜中核》sub-nuclear という文化形態をメソアメリカの北部や西部に認めた。南部の本格的高文化地域とは区別される，文明でもなければ未開でもない文化形態である [Kroeber 1948: 732]。その後，F. K. レーマンはビルマのチン族の研究においてこの概念を採用し，「文明（《核》文化地域）と接しながらも，その核文化やその社会とは別物であるような文化，社会の諸群」と規定した [Lehman 1963: 225]。

私は，東南アジア，オセアニアにおける文化の統計的分類を試みた際，このような概念が当てはまる文化群が，東南アジアから華南にかけていくつか認められることを論じたことがある。その一つは華南からインドネシアの一部にかけての民族群である。つまり，文化の樹状図分析では，I　東南アジア区大群，B　東南アジア高文化群，一　大陸部華南亜群，b　華南区分であって，Palaung, Nu, Lisu, ラオス，タイ国の Miao, Pai, She, ラオス，タイ国の Tai, 広東，広西の Yao, Puyi, 貴州の Miao, Kucong を含んでいる [大林　1990: 198]。また文化の因子分析では，因子 4 の強群で Pai, Lau (Mulaita), 貴州 Miao, Lolo, Choiseul, Negri-Sembilan Malay, She, Achang, 広東，広西の Yao, Puyi, であって，その文化内容は，婚資，ブタ，父方・夫方居住，一夫多妻婚，ウシ，土葬，父系出自，焼畑耕作，方形家屋，サツマイモ，ニワトリであり，これにつづく要素は物々交換，水稲，職業的祭司，ベテル噛み，酒などである [大林 1990: 204–205, なお233–234参照]。

ことに注目すべきことは，樹状図分析でも因子分析でも，ヤオ諸族とミャオ諸族がこれに入っていることである。ミャオ＝ヤオ諸族は華南の亜中核文化類型の代表者と見なすことができよう。

以上，私はエーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』の大筋を紹介し，それをさまざまな角度から評価することを試みてきた。しかし，それはあくまでも概論的な試みである。エーバーハルトの研究をもっと詳しく考えてみるためには，この

ような概論的評価ばかりでなくて，各論的な検討が必要である。第二部における彼の南方辺境諸民族の検討は，そのような各論的検討の試みである[3)]。

## 文　　献


ALLAN, Sarah, and Alvin P. COHEN
1979 Wolfram Eberhard: A Brief Biography. In Sarah Allan and Alvin P. Cohen (eds.), *Legend, Lore, and Religion in China. Essays in Honor of Wolfram Eberhard on His Seventieth Birthday*, San Francisco: Chinese Materials Center, pp. xix–xxiv.

BARTH, Fredrik
1956 Ecologic Relationships of Ethnic Groups in Swat, North Pakistan. *American Anthropologist* 58: 1079–1089.

BELLWOOD, Peter
1984 A Hypothesis for Austronesian Origins. *Asian Perspectives* 26(1): 107–117.

BENEDICT, Paul K.
1967 Austro-Thai Studies 3: Austro-Thai and Chinese. *Behavior Science Notes* 2: 275–336.

BUCK, John Lossing
1937 *Land Utilization in China.* Chicago: University of Chicago Press.

陳　国強・蔣　炳釗・呉　綿吉・辛　土成
1988 『百越民族史』北京：中国社会科学出版社。

『中国少数民族』編写組
1981 『中国少数民族』北京：人民出版社。

COHEN, Alvin P.
1990 In Memoriam: Wolfram Eberhard 1909–1989. *Asian Folklore Studies* 49(1): 125–133.

CRESSEY, George Babcock
1934 *China's Geographic Foundations.* New York: McGraw Hill.（クレッシイ著，高垣勣次郎訳『支那満洲風土記』東京：日本外事協会，1935）

田　継周
1990 「第一編　従遠古到秦漢的統一」翁独健（主編）『中国民族関係史綱要』北京：中国社会科学出版社，pp. 18–191。

EBERHARD, Wolfram
1937a *Typen chinesischer Volksmärchen, FF Communications* Nr. 120. Helsinki.
1937b Die Struktur einer mittelchinesischen Lokalkultur. *Artibus Asiae* 7: 87–91.
1942a *Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas. T'oung Pao Supplement* zu Bd. 36. Leiden: E. J. Brill.
1942b *Lokalkulturen im alten China. Teil 1: Die Lokalkulturen des Nordens und Westens. T'oung Pao Supplement* zu Bd. 37. Leiden: E. J. Brill.
1942c *Lokalkulturen im alten China. Teil 2: Die Lokalkulturen des Südens und Ostens. Monumenta Serica, Monograph* III. Peking.
1968 *The Local Cultures of South and East China.* Leiden: E. J. Brill.（エバーハルト著，白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化　華南・華東』東京：六興出版，1987）
1977 *A History of China.* Berkeley: University of California Press.

エーバーハルト，ヴォルフラム
1991 『中国文明史』大室幹雄・松平いを子訳　東京：筑摩書房。

FRANKE, Herbert, und Rolf TRAUZETTEL


3）本論文は1991–1993年度文部省科学研究費「中国諸民族における伝統文化の変容に関する比較研究」（代表者　周達生，課題番号03044158）による成果の一部である。

1968 *Das chinesische Kaiserreich* (*Fischer Weltgeschichte,* 19). Frankfurt am Main: Fischer Bücherei.

呉　綿吉

1994 「福建幾何印紋陶遺存与閩越族」荘英華・潘実海合編『台湾与福建社会文化研究論文集』台北：中央研究院民族学研究所，pp. 5–21。

GÖTZFRIED, Xaver

1980 *Die Domestikation des Schweins in Festland-Südostasien.* Magisterarbeit, Universität München.

de GROOT, J. J. M.

1921 *Chinesische Urkunden zur Geschichte Asiens. 1. Teil: Die Hunnen der vorchristlichen Zeit.* Berlin-Leipzig.

橋本万太郎

1978 『言語類型地理論』東京：弘文堂。

1980 「中国の言語の分布」『月刊言語』9(3)：4–12。

1981 『現代博言学——言語研究の最前線——』東京：大修館。

HIRTH, Friedrich

1908 *The Ancient History of China to the End of the Chou Dynasty.* New York.（フリードリッヒ・ヒルト著，西山栄久補訳『支那古代史』東京：丙午出版社，1929）

徐　朝竜

1994 「長江文明を追う——その歴史的事実と可能性——」『月刊しにか』5(8)：8–20。

KROEBER, Alfred Louis

1948 *Anthropology.* New York: Harcourt, Brace and Company.

LEHMAN, F. K.

1963 *The Structure of Chin Society.* Urbana: University of Illinois Press.

LEWIN, Bruno

1976 Japanese and Korean: The Problem and History of a Linguistic Comparison. *Journal of Japanese Studies* 2: 389–412.

LIGETI, Louis

1950 Motos de civilisation de Haute Asie en transcription chinoise. *Acta Orientalia Hungarica* 1: 141–188.

MASPERO, Henri

1927 *La Chine antique.* Paris: E. de Boccard.

1978 *China in Antiquity.* Amherst: University of Massachusetts Press.

中村慎一

1994 「稲作から見た長江文明」『月刊しにか』5(8)：21–25。

大林太良

1965 「Wilhelm Koppers の中国南部少数民族の研究について」『中国大陸古文化研究』1: 29–48。

1977 「日本文化の五つの源流——日本民族起源論と岡正雄学説」『歴史と人物』7(6)：158–167。

1990 「結果——2　多変量解析」大林太良・杉田繁治・秋道智彌編『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究報告別冊11号）pp. 191–234。

1992 「書評——エーバーハルト著，大室幹雄，松平いを子訳『中国文明史』」『図書新聞』2092号（3月7日）。

1995 「ヴォルフラム・エーバーハルト」『月刊しにか』6(9)：110–114。

岡　正雄

1994 『岡正雄論文集　異人その他　他十二篇』（岩波文庫）東京：岩波書店。

PRŮŠEK, Jaroslav

1953 Le récentes théories d'Eberhard sur les origines de la civilisation chinoise. *Archiv Orientální* 21: 35–92.

1971 *Chinese Statelets and Northern Barbarians.* Dordrecht: O. Reidel.

PULLEYBLANK, E. G.
1983 The Chinese and Their Neighbors in Prehistoric and Early Historic Times. In David Keightley (ed.), *The Origins of Chinese Civilization*, Berkeley: University of California Press, pp. 411–166.
REID, Lawrence A.
1984 Benedict's Austro-Thai Hypothesis— An Evaluation. *Asian Perspectives* 26 (1): 19–34.
林　恵祥
1936 『中国民族史』上海：商務印書館（大石隆三・中村弘訳『支那民族史』上下，東京：生活社，1939)。
崎山　理
1990 「越語資料」崎山理編『日本語の形成』東京：三省堂，pp. 457–483。
佐竹靖彦
1967 「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題（上)」『史林』50: 801–828。
1968 「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題（下)」『史林』51: 44–74。
蘇　秉琦・殷　瑋璋
1984 「関于考古学文化的区系類型問題」『蘇秉琦考古学論述選集』北京：文物出版社，pp. 225–231。
SPENCER, Joseph E.
1954 *Asia, East by South: A Cultural Geography*. New York: John Wiley and Sons.
諏訪哲郎
1988 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性——神話と言語から見た納西族の原像——』（学習院大学研究叢書16）東京：学習院大学。
鈴木満男
1994 『環シナ海の古代儀礼』東京：第一書房。
鄧　晩華
1993 『人類文化語言学』厦門：厦門大学出版社。
尤　中
1985 『中国西南民族史』昆明：雲南人民出版社。